

建築と社会 Architecture and Society

特集 「建築家」とは何か
－建築家の職能と価値を考える－

日本建築協会

09
2004

斎久工業株式会社

大阪支社

〒530-6013 大阪市北区天満橋1丁目8番30号 OAPタワー
TEL（06）6357-3193　FAX（06）6882-3193

本　社 〒100-0004 東京都千代田区大手町二丁目６番２号
TEL（03）3270-7411　FAX（03）3241-7236



私達はより快適な
人間環境を追求します。

スイッチON。私達の技術がフル回転をはじめます。あなたの身のまわりの、スイッチの向こう側に、私達のノウハウがいっぱいつめこまれています。あなたはただ触れるだけ、私達の出番です。オフィスビルや工場、そして街で「電気」「情報」「空気」「水」を通じて、より快適な環境を創造すること、先端の技術で高度な未来を提案すること、それが私達の仕事です。

SEM

住友電設　大阪本社 TEL.06-6537-3400　東京本社 TEL.03-3454-7311
http://www.sem.co.jp/

梅田阪神第2ビルディング、第二吉本ビルディング合同見学会

梅田阪神第2ビルディング
所在地　大阪市北区梅田2丁目
発注者　阪神電気鉄道株式会社
　　望月建設株式会社
設計監理　竹中工務店
施　工　竹中・大林・鹿島・望月・五洋・ハンシンJV
敷地面積　9,214.77㎡
建築面積　6,205㎡
延床面積　106,506㎡
構造規模　S、SRC、RC、B4、28F、P2
工　期　2001年12月～2004年9月

第二吉本ビルディング
所在地　大阪市北区梅田2丁目
発注者　第二吉本ビルディング株式会社
設計監理　竹中工務店
施　工　竹中工務店
敷地面積　3,314.51㎡
建築面積　2,450㎡
延床面積　44,000㎡
構造規模　S、SRC、B4、20F、P2
工　期　2002年6月～2004年9月





阪神電鉄・吉本グループによる２つのプロジェクトは、大阪駅前西地区の長年にわたる都市開発のしめくくりとなるものです。土地利用の効率化を図るだけでなく、大阪駅前を魅力的なものとするために、両事業者・大阪市・竹中工務店が様々なアイデアを出し合いながら構想を具現化していきました。

「梅田阪神第２ビルディング」は、第１期のハービスOSAKAとあわせて阪神電鉄の梅田地区における街づくりの集大成となる複合ビルです。JR大阪駅に面した街区共用のエントランス広場に繋がる幅10mのプロムナードを敷地北側に立体化して設けることにより、視覚的・空間的に都心部における快適な歩行者空間を演出しています。

「第二吉本ビルディング」は、高さ100mの透明なガラスに包まれたオフィス・商業の複合施設です。同じ吉本グループによる吉本ビルディングと四ツ橋筋をはさんで対になって、光と緑にあふれる空間を大阪駅前に生み出しています。

地下鉄コンコース・地下プロムナードと連結する地下のエントランス広場に設けられた吹き抜け空間と、そこに挿入された段状の緑が、大阪駅前西地区全体のエントランスとしての役目を果たします。　（吉田寛史・原田哲夫）

日　時　2004年10月23日（土）
　　13:00～16:30
講　師　吉田寛史／竹中工務店設計部
　　原田哲夫／竹中工務店設計部
集　合　現地／大阪市北区梅田2丁目
　　「ハービスエント」地下入口前広場
　　＊地下鉄四ツ橋線「西梅田駅」
　　地下コンコースと接続
定　員　100人
　　＊申込者多数の場合は抽選
参加費　会員1,500円、一般2,500円
　　学生は半額　＊税込
申　込　10月14日（木）までに
　　①催し名：「梅田阪神」
　　②氏名
　　③会員・一般の種別
　　④職場名または学校名
　　⑤参加証郵送先及び郵便番号
　　⑥連絡先電話番号
　　をお知らせ願います。
申込先　（社）日本建築協会編集事業課
　　大阪市中央区大手前1-7-31
　　OMMビル7階（私書箱107号）
　　〒540-6591
　　TEL.06-6946-6981
　　FAX.06-6946-6984
　　e-mail：jigyoka@aaj.or.jp
主　催　（社）日本建築協会
　　事業委員会情報見学小委員会
担当主査　赤松千州／竹中工務店

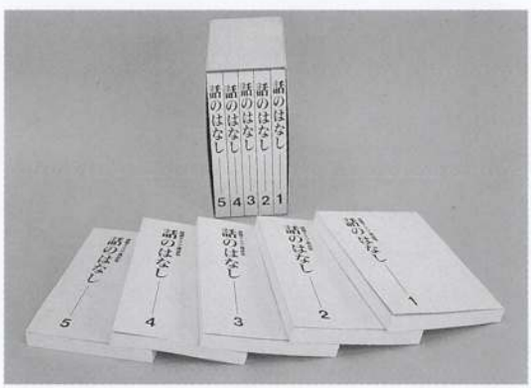
講演記録集「話のはなし」残部頒布します！

昭和47年6月に発足した「建築クラブ」（日本建築協会会員有志の集まり・現在休会中）は1997年、朝食会の第300回を記念して、講演速記録を集約し、最終的に118回分を5冊1セット（1冊平均約320ページ）の本にして発行いたしました。

「話のはなし」の講話の内容はとても多彩で、「おもしろい話」「貴重なはなし」「裏ばなし」などがいっぱい詰まっています。

ご希望のかたは電話またはFAXでお申し込み下さい。

申込先：日本建築協会事務局
TEL.06-6946-6981　FAX.06-6946-6984



B6判　5分冊

日本建築協会・阪急電鉄
共同企画
〈モダン建築再見2004〉
近代建築は関西がおもしろい!

第1回
関西近代建築の父 武田五一

第2回
近代建築の挑戦者たち


片岡安を中心とした日本建築協会草創期の人々

■第1回：京都市内見学
関西近代建築の父 武田五一

日　時　2004年10月2日(土)
9:30〜16:00頃
講　師　石田潤一郎
京都工芸繊維大学教授
集　合　9時30分・関西電力京都支社
(JR京都駅北側)　1階ホール
見　学　京都市内に残る主な武田作品
…関西電力京都支社（外観）
…東本願寺前噴水……
…東本願寺内事所……
…清水順正［旧松風嘉定邸］
にて昼食……
…何有荘［旧稲畑勝太郎邸］
洋館・庭園……
…京大時計台…京大建築学教
室館（外観）……
…同志社女子大学ジェームス
館…栄光館…【現地解散】
※移動は徒歩・タクシーを
利用
定　員　50人(先着順)
参加費　9,000円
(会員は500円割引)
申　込　この企画は阪急電鉄
(株)創遊統括部（右
記）までお申し込みく
ださい。

■第2回：講演&シンポジウム
近代建築の挑戦者たち

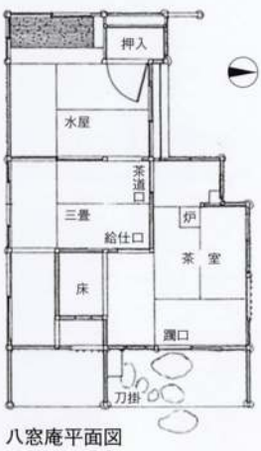
日　時　2004年10月30日(土)
13:30〜16:00
場　所　大阪倶楽部
［設計:安井武雄　大正13年］
大阪市中央区今橋4-4-11
*大阪倶楽部見学
12:30—13:00
（定員30名・予約制・希望
多数の場合は抽選）
講　演　・関西建築界の巨人・片岡安
坂本勝比古
神戸芸術工科大学名誉教授
・大正の新風
石田潤一郎
京都工芸繊維大学教授
・モダン住宅の開花
山形政昭
大阪芸術大学教授
・関西アヴァンギャルド
梅宮弘光
神戸大学助教授
＊コーディネーター／中川　理
京都工芸繊維大学教授
定　員　100人（先着順）
参加費　3,500円（会員は500円割引）
申　込　この企画は(社)日本建築協会
編集事業課（右記）へ。


武田五一

申込先　▶関西近代建築の父武田五一
阪急電鉄(株)創遊統括部
〈フィールド・セミナー係〉
〒530-8389
大阪市北区芝田1-16-1
TEL.06-6373-5327
FAX.06-6373-5329
▶近代建築の挑戦者たち
日本建築協会編集事業課
〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31
OMMビル7階（私書箱107号）
TEL.06-6946-6981
FAX.06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp
＊催し名、氏名、会員・一般の
種別、職場名、連絡先所在地・
郵便番号・電話番号をお知ら
せください。

茶室見学会
第21回
奈良の八窓庵
—伝古田織部

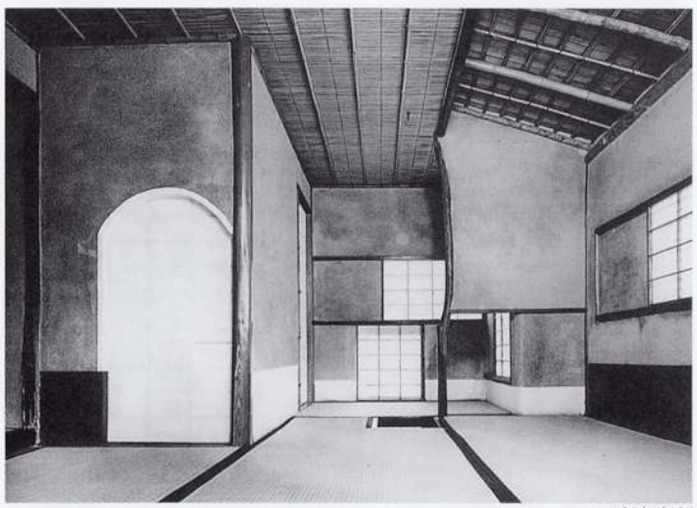
（再掲）



八窓庵平面図

今回は、利休の後継者となった古田織部（1544-1615年）の作と伝えられる奈良国立博物館構内の茶室を見学します。織部は美濃に生まれ、信長に従って戦功を立てた武将ですが、秀吉に「武門の茶法」を制定するように要請された伝えがあるように、利休から学んだ茶の湯を武家社会にふさわしい形式にまとめ、同時に視覚的な表現を茶室に取りいれたといわれています。その後、徳川将軍家の茶道指南役となり、茶匠としての最高の地位に就きました。
八窓庵は、三畳台目に一畳の貴人座が付くL型の平面で、正面に躙口を設け床前の貴人座を際立たせる構成になっています。ただ、織部の代表的な茶室である燕庵形式との相違から本人の作か疑問が残り、「伝」とされています。しかし、窓の配置など壁面の構成が端正に整えられている点なども織部らしさを表現しています。　（森田芳次）

主　催　(社)日本建築協会
事業委員会情報見学小委員会
担当主査　森田芳次／安井建築設計事務所


八窓庵内部

日　時　2004年9月17日(金)
14:00—16:00
講　師　中村昌生
京都工芸繊維大学名誉教授
集　合　現地・奈良国立博物館　新館エ
ントランス／JR奈良駅より徒歩
20分。近鉄奈良駅より徒歩15分。
定　員　30人＊申込者多数の場合は抽選
参加費　会員 4,000円、一般 5,000円
学生半額　＊税込
申込先　(社)日本建築協会編集事業課
大阪市中央区大手前1-7-31
OMMビル７階(私書箱107号)
TEL.06-6946-6981
FAX.06-6946-6984
e-mail : jigyoka@aaj.or.jp

建築と社会 09 2004
Architecture and Society
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN
1917年創刊　第85集／通巻990号

今月の表紙

企画／高野直樹
企画と写真／伊藤　彰
表紙デザイン／窓田衣里

●歴史を感じさせる遺構の一部分。大阪難波宮址、大極殿の階段です。古代における大阪府域の中心難波津、古代の帝都であった難波宮は大阪の歴史を物語る大切な財産です。北西に構える大阪歴史博物館は、地下に眠る難波宮の遺構を保存して建てられており、地下の遺構は一般公開されています。また、上階の展示室から望む難波宮址の眺めはすばらしく、展示演出も非常に優れています。たまには手を休めて、大阪の歴史に思いを馳せてみませんか。(高野直樹)

■特集予告
10月号／巨大地震にそなえて
11月号／私の空間作法
12月号／第51回青年技術者

編集委員会(平成16年度)
■副会長　難波　尚
井上　豊　△肥嶋　好浩
中井　進　向井　洋一
■編集担当理事　安田　拓矢
上原　正行　山本　健二
岡田　聿之　□設備分科会
久我　三郎　△梶井　宏修
佐藤友美子　河井　康人
◎設楽　貞樹　河津　隆之
竹中　統一　近藤　国夫
立成　良三　近藤　正一
広原　盛明　多賀　浩三
堀田　修二　田ノ畑好幸
■特集小委員会　谷野　太志
□計画分科会　桝井　貴廣
★計画系　松浦　肇
飯田　匡　村上幸三郎
伊縫　憲幸　□施工材料分科会
鈴木　克彦　植田　実
田中　直人　竹中　秀文
高橋　和也　太刀川丈爾
辻　武之　(未定)
△紅谷　昇平　平田　茂良
松田奈緒子　平野　剛
三宅　次郎　△吉田　正友
森　康郎　□法令分科会
吉村　英祐　坂中　信隆
★建築計画系　鶴田　和幸
荒木　宏之　野村　彰
江副　敏史　溝上　省二
奥村　明孝　△山口　一郎
菅野　忠司　山根　正利
木多　彩子　■作品作風小委員会
楠　敦士　赤木　隆
小林　優子　石塚なぎさ
△桜井　則雄　居内　章夫
笹村　欽也　井上　雅祐
靜　茂夫　池上　明
所　千夏　川上比奈子
野田　隆史　倉渕奈千子
★インテリア・住宅系　澤田　純一
阿部　泰浩　寺岡　宏治
加藤　力　鞆野　淳司
黒栁　亮　○中村　文紀
高野　直樹　林　孝司
△田中　浩介　前川　治彦
戸井賢一郎　増田　敬彦
西田　和子　山田　俊紀
ペリー史子　■広告企画小委員会
本山　仁　荒本　俊明
□構造分科会　石塚　俊明
稲田　竜也　大竹　賢次
大氏　正嗣　斉藤　治久
大住　和正　竹内　健介
木下　隆嗣　前田　衛
白髪　誠一　横田　和生
田渕　勝道　○渡邊　浩文
永原　吉浩

◎委員長 ○副委員長 △幹事

印　刷　2004年8月25日
発　行　2004年9月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電　話　06-6946-6981
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
(株)NPCコーポレーション
定　価　1200円〔税込〕

CONTENTS

特集●「建築家」とは何か—建築家の職能と価値を考える—

[総論1] あゝ建築家 されど建築家●太田隆信 — 14
[総論2] 21世紀の社会と建築家●馬場璋造 — 18
[各論1] 精神への偏愛●柏木浩一 — 22
「建築家」とは何か●遠藤秀平 — 23
時をこえて●吉羽裕子 — 24
建築家の役割●岡本　隆 — 25
建築家の今—建設会社設計部からの眼差し—●天野直樹 — 26
「知られざる建築家」の遺産●河野正彦 — 27
[各論2] 様々なシーンの響き合う街●小林幹彦 — 28
「軽率な建築家」と輝く技術者●中田義成 — 28
「建築家」に望む「職能」●長谷部完司 — 29
人への心に己の心を●山岸　豊 — 29
[各論3] 建築教育におけるスタジオ・フィールド・ワークショップ●本多友常・平田隆行 — 30

会告　梅田阪神第2ビルディング.第二吉本ビルディング合同見学会.〈モダン建築再見2004〉①関西近代建築の父　武田五一②近代建築の挑戦者たち.茶室見学会㉑奈良の八窓庵　1

作品作風
堺市立のびやか健康館　4
尼崎市立弥生ヶ丘斎場—光庭のある斎場—　6
千船クリニックス　8
高速オフセット堺本工場　10

gallery　「忙中、閑あり」(後藤哲夫)●赤木　隆　12

法令コーナー　法改正シリーズ・1—景観緑三法の公布と施行●岡本哲夫　32

構造の頁　資源循環型建築システムをめざして〜ショッピングセンターにおける取り組み〜●須賀順子　33

information　国際デザインコンペティション大阪2004作品募集.『世界の巨大建造物ウィーク』TV放映.講座「琉球の庭園と文化」.報告会「工業化住宅の展望」.関西三大学合同建築展Final!!!.唐桑・海と森の大工展.特別展「近世京都の狩野派展」—京都文化博物館—.カルティエ=ブレッソン写真展.アトリエ・ワン『街の使い方』展.建物を長く大切に使うための標語募集　34

入賞発表　第4回読者と選ぶ「建築と社会」賞
総評／井上　豊.　講評／徳矢典子・柏木浩一・鈴木克彦　36

▲外観

▼エントランスキャノピー



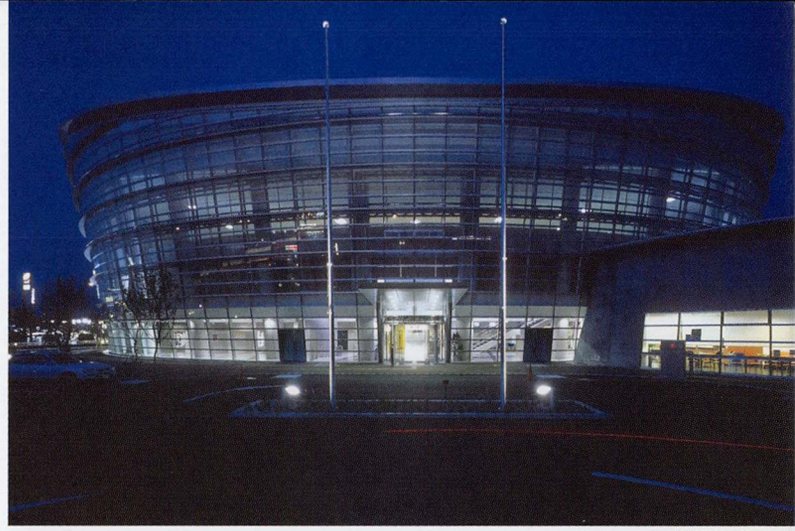
▼エントランスホール



作品風

設計・監理■
堺市建築都市局建築部
黒川・高橋共同企業体

施工■
（建築工事）東急・森本・金本建設工事共同企業体
（電気設備）住友・小山・西尾建設工事共同企業体
（空調設備）ダイダン・近配・丸仙建設工事共同企業体
（給排水衛生設備）不二熱・大同・共栄建設工事共同企業体


▲外観（夜景）

堺市立のびやか健康館

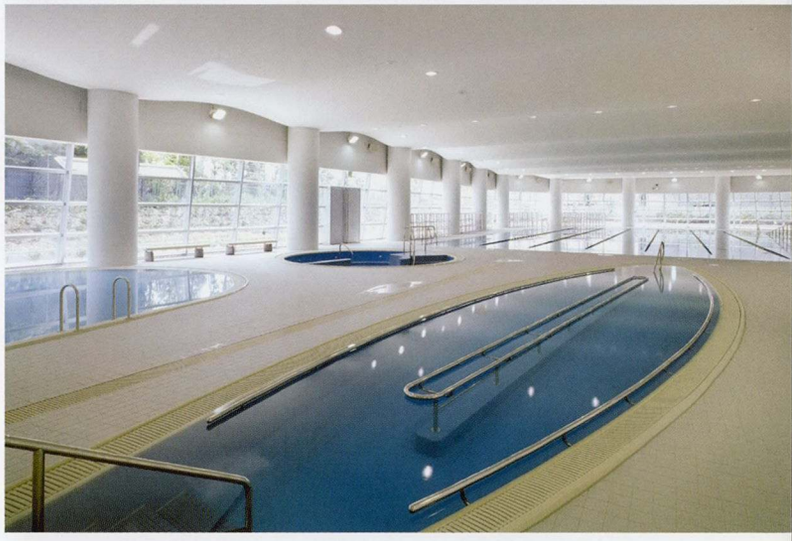
本施設は、隣接する清掃工場のごみ焼却余熱を有効利用し、市民の健康増進やスポーツ・レクレーション活動の推進と市民福祉の向上を目指した施設です。

・スポーツを通じての市民の健康増進
・「ゆとり」「集い」「ふれあい」の場づくり
・市民の生活文化の向上

の３点を施設整備の基本コンセプトとして、温水プール・温浴施設・フィットネススタジオ・多目的グラウンド等の多彩なスポーツ施設とレクレーション性の高いメニューを提供し、また、ユニバーサルデザインを導入するなど、低年齢層から高年齢層までの幅広い利用者が快適に利用できる施設づくりを心がけた設計が行われています。また、堺市の「フェニックス文化軸構想」で位置づけられた市の東の玄関口のシンボルとして、独自性と象徴性が高く、透明感のある開かれた建築としました。隣接する大泉緑地公園の緑と連続する、豊かな植栽に囲まれた楕円形のアリーナは、「森に浮かぶガラスの船」をイメージしたデザインであり、海外貿易の拠点として繁栄した堺の伝統と、豊かな緑を育む現代の堺を表現しています。

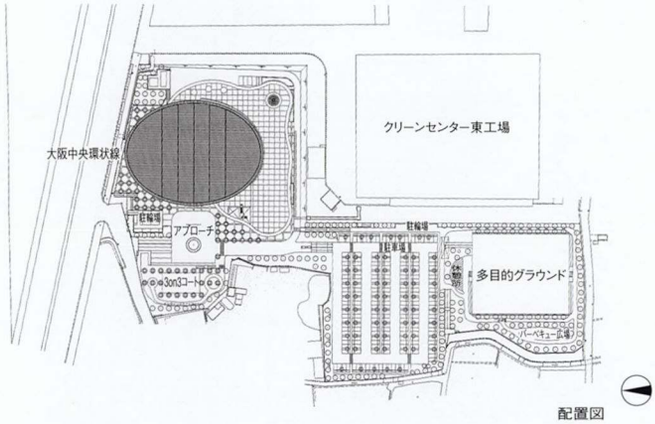
（梅林良行／黒川紀章建築都市設計事務所）

▼温水プール



▼温浴施設（風呂）





配置図

▼インドア・テニスコート

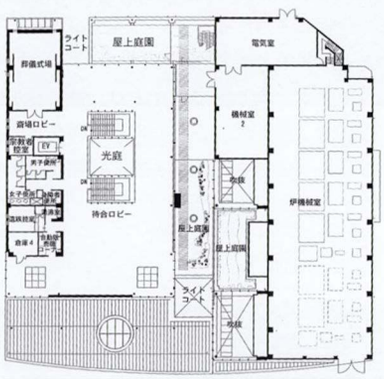


所 在 地 ―― 大阪府堺市金岡町2760-1
敷地面積 ――26,795.05㎡
建築面積 ―― 6,732.34㎡
延床面積 ―― 9,866.20㎡
構造規模 ――RC、SRC、一部S、B1F、2F
工　　期 ――2002年３月～2004年２月
最 寄 駅 ――大阪市営地下鉄御堂筋線・新金岡駅
撮　　影 ――小林浩志

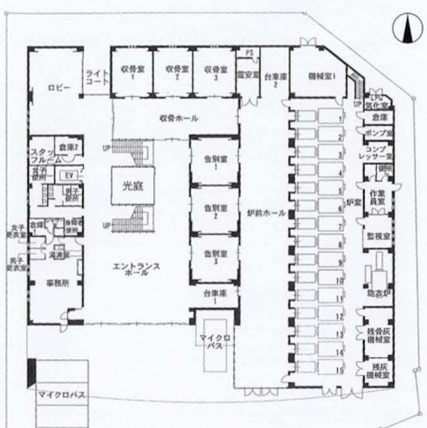
全景

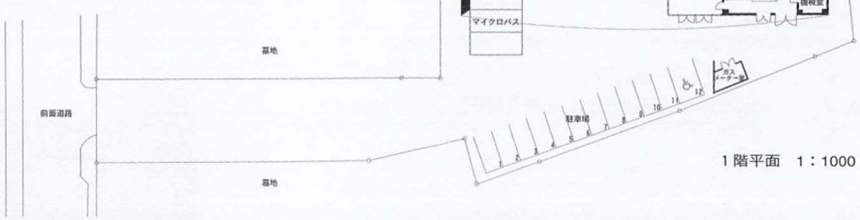


告別室



2階平面





1階平面　1：1000

作品

設計・監理■
大建設計

施工■
建　築：三井住友・神崎建築共同企業体
炉設備：宮本工業所

尼崎市立弥生ヶ丘斎場―光庭のある斎場―

本計画は旧施設の老朽化による建替え事業としてスタートした。同一敷地内で、旧斎場の機能を継続させながら、部分的に建替えを進める計画となった。ローリングによる計画上の制約をクリアーしながら、完成後に最適となる空間計画を提示するプログラムが要請された。

特に、敷地の狭小さは計画上、施工上大きな制約となったが、その様な条件の中でも完成した空間は現代生活に即した広がりが感じられる手法を模索した。具体的には、S、SRC、RCの混構造による15mスパンの採用、自然光の多様な取り込み手法等により、葬送の流れに寄り添った多様な空間を形成した。

施設中央の光庭は、葬送する人々の内向する精神を受け止める虚ろなスペースであるとともに、空間全体に自然光を取り入れながら2階の待合へと人々を導く場面転換の場である。光庭の床面には旧施設で使われていた12個の石がサークル状に埋め込まれている。それによって時の流れを感ずる場であって欲しいと考えている。

外観のガラスの箱による構成は、死者の霊を送り向かえする灯ろうをイメージしながら、内部機能と光の取り入れ方の回答をさぐった結果である。

この施設が、ともすれば負のイメージが強い斎場を変える力をもち、人の生涯の一場面としての本来の位置付けができ、現代人の生活意識、空間意識に近づいた空間となることを願っている。

（百合野耕治／大建設計）



所 在 地 ―― 尼崎市弥生ヶ丘町
敷地面積 ――3,906㎡
建築面積 ――2,138㎡
延床面積 ――3,356㎡
構造規模 ――SRC、RC、S、2F
工　　期 ――2001年3月～2004年2月
最 寄 駅 ―― 阪急神戸線・園田駅
撮　　影 ――伸和



エントランスホール



炉前ホール



▲収骨室

▼待合




千船クリニックス
千船病院
P
入口





作品風

設計・監理■
東畑建築事務所

施工■
大林組・ハンシン建設共同企業体
ガラスブロック製造：日本電気硝子
ガラスブロック施工：エヌイージー建材

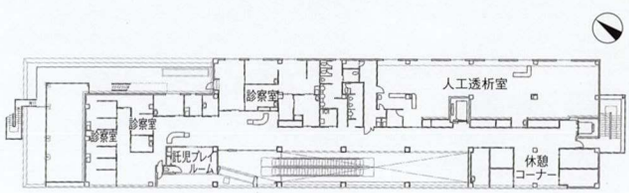
千船クリニックス

地域住民に親しまれた駅前の医療法人病院が診療環境の向上を目指して隣接地所有者と共同計画した診療所の建物である。独立移転した外来診療部門が１～３階に、管理部門が４階に入居している。地階と１階の一部は建物所有者が運営する駐車場である。

私鉄駅から距離20m足らずという立地は恵まれすぎるほど恵まれている。一方、ここまで近いと電車の通過時の騒音が90dB（A）を超えるという診療行為には過酷な環境でもある。

鉄道の高架線路に面する南西側の壁面には、開口部を設けず、“光を通す遮音壁”としてガラスブロックのカーテンウォールを採用した。患者のプライバシーに配慮して個人は特定できないが、内部の活気ある人の動きと駅や街の賑わいは相互に楽しく眺められるよう、ガラスブロックはプレーンタイプとしている。年々変化し続ける医療行政と需要に追従していくために、内部はパーティションを主とした間仕切りとし、診療科目に特化しすぎない標準装備の診察室群で構成した。

７月の開院後も、音についての意見はお褒めの言葉を含めて、いただいていない。あえて伺うと「そういえば、電車の音は聞こえませんねえ。」という感想。忘れていることが、難関であった課題を解決できた証ということでしょうか。　（大塚裕弘／東畑建築事務所）



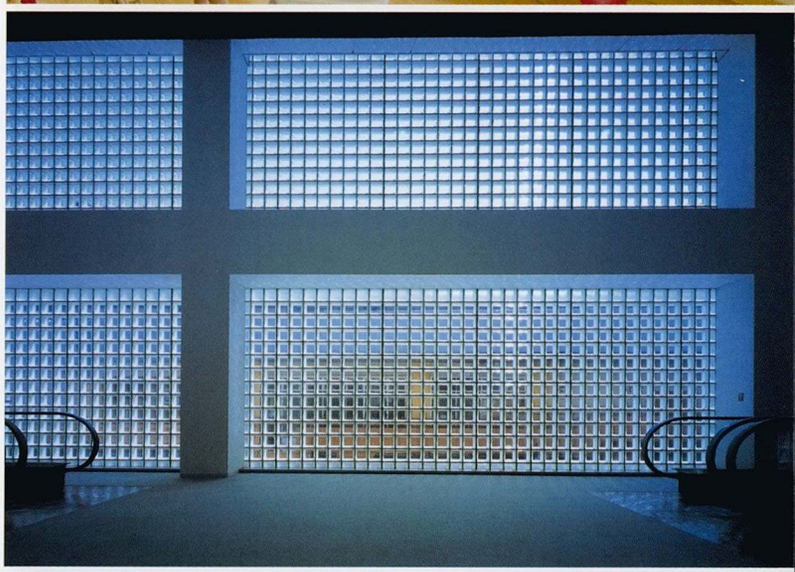
3階平面図　1：1000

所 在 地 ――大阪市西淀川区佃2丁目
敷地面積 ――1,564.39㎡
建築面積 ――1,234.87㎡
延床面積 ――4,906.05㎡
構造規模 ――S、一部RC、4F、B1F
工　　期 ――2003年４月～2004年６月
最 寄 駅 ――阪神電鉄本線・千船駅
撮　　影 ――花城辰男（時空アート）

左頁：西面外観、カーテンウォール夜景、エスカレーターホール
上より：鳥瞰、プレイルーム、カーテンウォール内観、南面外観











所 在 地 ——堺市松屋大和川通3-132
敷地面積 ——10,036.39㎡
建築面積 —— 4,955.02㎡
延床面積 ——15,122.62㎡
構造規模 ——RC、B1F、4F、P1
工　　期 ——2002年12月～2004年３月
最 寄 駅 ——大阪市営地下鉄四ツ橋線・住之江公園駅
撮　　影 ——古川泰造

作品風

設計・監理■
竹中工務店

施工■
竹中工務店

高速オフセット堺本工場

この建物は、本社としての機能をあわせもつ、日刊新聞の印刷工場である。阪神高速大和川線の建設に伴い、現工場の移転が必要となったため、既存の分工場の隣地に新工場を設けて工場機能を集約するとともに、街区の一体的な環境整備を行なった。

「機能と環境の高度な融合」をテーマとし、印刷工場としての最新鋭の機能性と、人と環境にやさしい空間との融合を目指した。

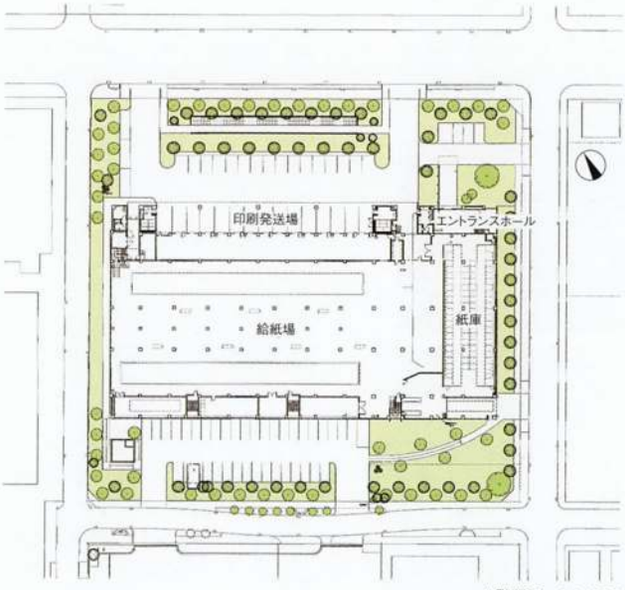
印刷工場の心臓部である4層吹抜の輪転機室の周囲に、諸室を機能的に配置することによって、機器の騒音や振動の外部への影響を遮蔽すると同時に、事務室や休憩室に光と風を最大限に取り入れられる構成とした。

外観は、印刷から発想したストライプ状の陰影をもったタイルを用い、シンプルで品格のあるデザインを心懸けた。

敷地は、北側に位置する大和川に対して公園を介して開けていることから、最上階に庇のあるスカイデッキを配し、食事の際に大和川の眺望を最大限に楽しめる場所とした。また、外部に大きく開かれたガラスカーテンウォールの階段室や、最上階に緑のあるパティオを配置することにより、外部空間との接点を豊かにし、明るく開放的なリフレッシュ空間を実現した。

建物の周囲に敷地面積の25%に及ぶ緑地を確保し、四季折々の花が楽しめる樹木を配するとともに、周辺歩道の改修も行い、良好な景観を実現することによって、地域貢献としている。

(川合智明・文野志宏)



1階平面　1：1800





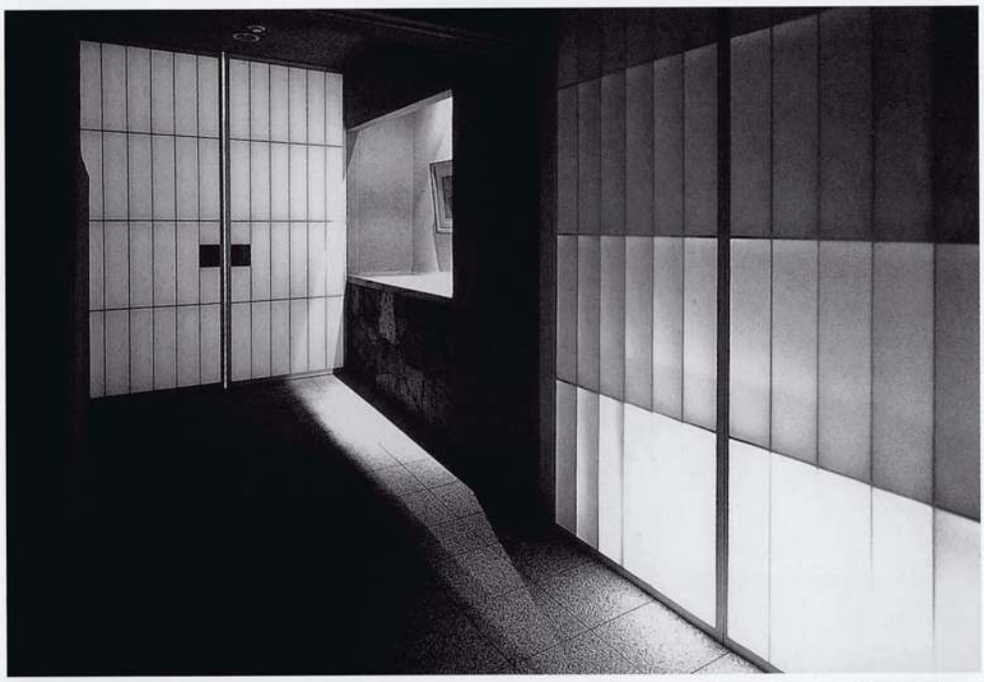


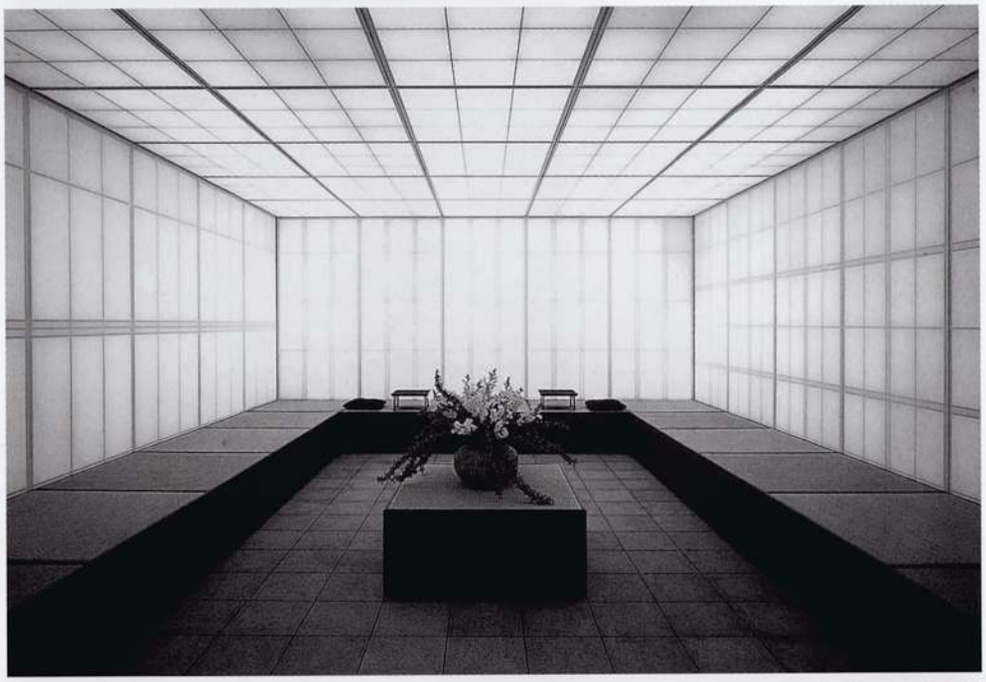


gallery

「忙中、閑あり」

設計
後藤　哲夫









『サロン閑』は幅4.5m・奥行き8.1m・高さ2.4m、床は砂岩系の由良石、壁・天井は障子紙を２枚重ねた太鼓張りの木製建具、そして移動可能な畳敷きの縁台で構成された主張しない空間である。自然体で静寂した空間は、使用者の懐に合わせて多様に変化することができる。障子に向かって座禅を組むもよし。縁台に腰掛け将棋や囲碁を打つもよし。縁台の上で横になり昼寝するもよしだ。施主は雅楽の奏者を呼び、客人を招き演奏会なども行っている。「忙中、閑あり」。使い道を決めつけない畳のある空間は、スピードアップした世の中に「間」を与えてくれる。

後藤　哲夫
1969　香川県生まれ
1995　芝浦大学大学院修士課程修了
1995　株式会社 隈研吾建築都市設計事務所
1997　独立し沖縄で設計活動を行う
2000　哲アーキテクツ設立
2001　フランス人建築家：Marc Barani（フランス・ニース）のもとで研修を受ける
2004　有限会社　後藤哲夫建築事務所に社名変更

企画編集　赤木　隆（作品作風小委員会）

特集

「建築家」とは何か

―建築家の職能と価値を考える―

建築はいつの時代でも、顧客や社会にとって重要な役割を担ってきた。環境問題・IT社会などの新しい命題をかかえる今日にあって、建築への要求が多様化・高度専門化し、建築への期待度・重要性はより高まりつつある。一方、ものづくりを担う「建築家」の定義や職能、社会的位置付けについてはいまだ曖昧な部分が多いように思われる。

また、JIAによる登録建築家制度、日本建築士連合会による専攻建築士制度が立ち上げられ、登録者の情報公開などがなされているが、その職能と価値は、いまだ一般市民には見えにくい部分がある。

本質的には「建築家」自身が、建築を通して如何に顧客や社会に貢献できるのか、「建築家」自身の資質や感性、建築への真摯な姿勢など、トータルな職能に対する顧客や社会からの評価が、「建築家」の価値に結びつくものではないだろうか。

本特集では、「建築家」の職能と価値、社会的責任・倫理観などを、改めて見直してみたい。また建築教育のあり方についても考えたい。

編集委員　桜井則雄

総論 1

あゝ建築家されど建築家／太田　隆信

総論 2

21世紀の社会と建築家／馬場　璋造

各論 1

精神への偏愛／柏木　浩一

「建築家」とは何か／遠藤　秀平

時を超えて／吉羽　裕子

建築家の役割／岡本　隆

建築家の今―建設会社設計部からの眼差し―／天野　直樹

「知られざる建築家」の遺産／河野　正彦

各論 2

様々なシーンの響き合う街／小林　幹彦

「軽率な建築家」と輝く技術者／中田　義成

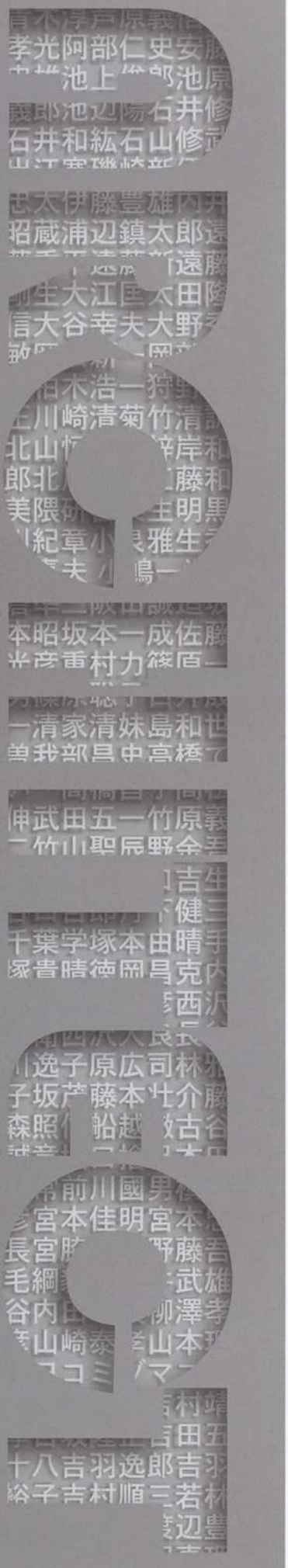
「建築家」に望む「職能」／長谷部　寛司

人への心に己の心を／山岸　豊

各論 3

建築教育におけるスタジオ・フィールド・ワークショップ／本多友常・平田隆行

企画　建築系分科会



あゝ建築家 されど建築家

太田隆信

はじめに

今月の4日で70歳。1958年、坂倉準三建築研究所に入所以来今日まで、ひたすらに建築の設計監理の仕事を続けてきた。これからも、これまで同様に、この仕事を続けてゆきたい。それだからこそ心機一転、設計監理活動の原点にかえって、新たなる精神で明日からの仕事に望まねばならない等と考えていた矢先に、「建築家」の職能を考えるという大変なテーマを頂戴した。こういう設問に真っ向から答えるのは、天に唾することにもなりかねないと重々承知の上で、青臭く、書生談義よろしく論じさせていただく。

建築家とは

まずは、建築家という言葉について共通の認識をと、使いなじんだ改訂新潮国語辞典（1977年）を改めて引いてみる。「建築家は建築の設計・工事監督を職業とする人」と出ている。ちなみに、建築士は出ていない。もうひとつ、広辞苑第四版（1991年）も引いてみると、こちらは建築家がなくて、「建築士は建築士法所定の国家試験により免許を受け設計・工事管理などの業務を行う技術者」と出ている。“新潮”に建築家があって建築士がない。「岩波」に建築家がなく建築士がある。これは、ちょっとした驚きのある発見であった。念のため、両辞典の最新版をチェック。新潮第2版（1995年）には、建築士が、広辞苑第5版（1998年）には建築家がちゃんと出ていた。建築家は職業、建築士は免許を受けた技術者、この分かりやすく、納得のいく説明が両辞典に載るほどに、一般常識となったのはせいぜいここ10年のこと。画家、政治家等とくらべるまでもなく、まだまだ新しい響きの職能、発展途上の言葉と、ここのところは、しかと認識しておきたい。

もっとも、建築家をもって自認する面々、こういった単純で分かりやすい定義に納得するはずもない。何かもう一言つけ加えて、ひとひねりして建築家像を語る。そのあたりのズレ、ニュアンスの差がそれぞれの建築家の自画像にもなっている。つまり、100人の建築家がいれば、100通りの建築家像があるわけで、建築家について云々する場合の大切なポイントだ。

ここまで、建築家を建築家寄りの立場から論じてきたが、今様に言うと一般消費者、いうところのクライアント側からすると、設計・監理者イコール建築家ということには抵抗感があるようだ。建築家というよりは、設計者、設計士と言われるケースが圧倒的。辞書を紐解くまでもなく“家”という字には、専門の人、その道の人という職業を表す意味と、もうひとつ、特定の才能・技能のある人、ある特性を備えた人、その道にすぐれた人といった意味がある。父親が建築家、母親が画家といったケースを除いて、ごくごく普通に人生で最初に出合う“家”は、勉強家であったり、読書家であったり、いずれにせよ職業を表す“家”ではなく、その道にすぐれた人、達人を表す意味の“家”ではなかったか。勉強家、読書家のインパクトが大きすぎて、素直に、建築の設計・監理を生業とする人イコール建築家とはいいがたい。設計・監理を職業とする人々のなかで、すぐれた人だけが建築家と呼ばれるべきではないか、そんな思いが頭の隅っこにこびりついているのかな。

だから、建築家をもって任ずるあなたが建築家を自称しても、10年早いという感じで、設計者、設計士と軽くいなされてしまうケースもある。といって、建築家に仕事を頼もうという訳でもない。建築家が創るのは作品であって、私の家、私のオフィスではないという強い思い込みが、消費者にあるようである。建築家に私なんぞの仕事をお願いしては恐れ多いという気持ちと、建築家の先生にお願いしたからには、たとえ自分の意にそわぬところがあっても、じっと我慢、堪え忍んで住み続けてゆかねばならない。そんなあほらしいこと出来ますかいなという気持ちとが入り混じっているのかな。建築家が気軽に、私の仕事だけには設計者としてかかわってほしい、このあたりが案外消費者の本音なのかもしれない。

建築家について、もうひとつのテーマは建築士。家を建てるとして、普通の会話では建築士に設計を依頼するとは言わず、やはり、設計士、又は、設計者に依頼するという表現になるようだ。あくまでも、建築士は技術上の資格、住宅の設計は、その資格にプラスアルファーする資質があってこそ可能なのだ。そのあたり、消費者はちゃんと心得ている。さりとて、建築士の資格を無視しているわけでもない。建築家が建築家たるにはまず建築士の資格程度は取得しておいて欲しい。それが必要条件だ。しからば、十分条件はとなると、これが結構むつかしい。前述、100人の建築家がいれば100通りの建築家像があるのと同様に、100人の消費者には、100通りの十分条件、つまり100通りのあらまほしい建築家像があるということだろうか。

建築家の誕生

建築の設計・監理は、近代化に伴う新しい仕事、つまり建築家は、明治維新以後の新しい職業である。それ以前は、大工・棟梁のシステムが、伝統の木造工法をしっかと支えていた。新参の職業人である建築家と、伝統の技法を継承する職人との間で、深刻な対立や、打ち壊しがあったかというとそうでもなく、両者は、洋風と和風、官の洋風に対する民の和風、仕事は洋風、生活は和風等々、巧みに住み分けてきた。こういうのも和魂洋才と言うんだろうか…。東ア

ジアの苛酷な近代化のうねりの中で、我が国の近代化は、比較的穏やかなものであった。先人の叡知と努力のたまものとはいうものの、うまく論点をはずして調和させて問題を先送りするという私たちの性格によるところも大きく、いまだに、建築の設計・監理というプロフェッション曖昧なところがある。

話を150年前に戻して、1853年のペリー提督の来日以後、欧米人との交渉、居留に伴い、西欧の生活、建築も日本に上陸。初期の棟梁の手になる擬洋風建築の時代を経て、御雇い外国人建築家設計の本格的な洋風建築の時代が1870年代には始まった。建築家の濫觴の頃である。御雇、出稼、さまざまなかたちの外国人建築家の時代はせいぜい30年、日本人建築家の登場となる。当時の建築家の使命は明治日本の近代化の一翼を担って、欧米諸国に対して恥ずかしくない洋風建築をつくることにあった。まずは上からの近代化、帝国日本の躍進と共に官衛から大企業、そして近代産業の場へと洋風建築は拡がっていったのだが、太平洋戦争に至る近代化はそこまで。だから、建築家も消費者にとっては関係のない存在。だが、その時分から「建築家とは」「建築家の職能とは」と熱っぽく先輩建築家は論じてきてはいた。しかし、それはあくまでも、華胄界の議論としか世間の目には映らなかったようだ。そういう時代であった。

日本の近代化の面白さは、必要な部分のみを近代化する、それもやむを得ず不承不承のニュアンスすら感じられる近代化であった。梅干しのにぎりめしで、ゼロ戦を飛ばすという戦時中のあのスタイル、当時はあれしか仕様がなかった。と同時に、これぞ日本の近代化のあらまほしい姿という感じもあったのではないか。まさしく和魂洋才の具現化という発言に対して、深く頷かれる向きと、ブラックユーモアとして聞き流される方々、どちらが正しいというのではなく、なるほどそういう切り口もあるのか、せめてその程度の寛容の精神をもって、過去を振り返ってみる。これが大切なところ。20世紀の議論には、こういった精神に欠けるところがあった。これが敗戦そして世紀末の混迷の原因ではなかったか。建築という分野を超えて反省したいところである。

話を元へもどして、戦前の日本流近代、つまり仕事の近代化から、戦後の生活の近代化へ、この大きな流れの変化は、敗戦という当時の人々には思いもよらない大変なインパクト、と言うよりはショックがあって始めて可能になった。なんだこれもやっぱり外圧か等と、軽く流さないでほしい。外圧がなければどんな方向に進んでいったか、毎年7月末から8月の暑い季節を迎えて同じことを自問自答。テーマからはずれてしまったかもしれないが。はずれついでにもう一言、思いもよらない敗戦と書いたが、それは8月15日までのこと。その翌日からとは言わぬにしても、いつのまにか敗けて当然、いや、敗けるべくして敗けたというふうに話が変わってしまった。いや実に簡単に、ころっと変わるものである。国民学校5年生の私は、只々その変わり身の早さに唖然としているうちに、いつしか自分もそうなっていた。あの頃のことを語りはじめると、どうしても戦後の立場になってしまう。戦時中のあの気持ち、あの愛国心を当時のままに話すことはできない。それは私だけのことではない。戦後から今日への流れを理解するには、ポツダム宣言以後、新生日本の誕生なんてあたりから論じても本当のところは見えなてこない。もうひとつ前に遡ってこそ見えてくるところがある。しかし、この遡るというあたりが実にむつかしい、戦後書かれたものはまず駄目と考えた方がいい。同時代の一級史料を読み解くところからの探究を、特に若い方々に、この機会にお願いしておきたい。

建築家の再生

さて戦後、都市部は焼け野原。まずは衣食住の確保を、ということで、ようやく近代建築、それに伴い建築家が一般消費者の前に姿を表すことになった。明治維新以来、2度目の近代化。いや、今度が本当の近代化。教育制度が新しく現行のかたちに決った1947年頃のラジオ、新聞の論調を懐かしく、今でもはっきりと覚えている。その頃を議論の時代、とりあえず何とか生きてゆこう、新しくこれからを切り開いてゆこうという時代であったとすると、1950年代後半は、ようやくそういった思い具現化の頃。もはや戦後ではないと言われたのもこの頃だ。

私が建築の勉強を始めたのもこの頃だった。近代建築が輝やいて見えた時代。明治の頃もそうだったのだろうが、雲の上の出来事、それが今回はすべての人々の身近な存在として近代建築を認識することになったのだ。コンクリート造の建物は燃えない、ひどくやられても軀体だけは、黒く焼けてもちゃんと残っている。焼夷弾体験のある人々にとって、それは大変なインパクトであった。燃えない住宅という観点から、1955年以後の公営住宅、公団住宅等、集合住宅の誕生の意義の再確認が必要ではないか、この頃は建築家も燃えていた。日本の近代化、生活の近代化を具現化するのは建築家との心意気で、日本民主化のうねりの中、戦後復興から新しい近代的な生活の確立へと大奮闘の時代であった。

文明開化の頃の建築家がパイオニアとして、上からの近代化に貢献したとすれば、この時期、戦後第一期の建築家は、当時の言葉で言うと、国民一般大衆の民主化近代化をめざして、建築活動を行っていたのだ。明治期の活動は、近代化ではなく、西欧化にすぎなかった。真の意味での近代化は、今ここに始まる。私たちが近代日本のパイオニアなのだ。新しくできたばかりの新制中学校で、そんな

ふうに教えられた。敗戦、それに続く諸々の出来事のなかに、ショボッとしていた私達少年にとっては、フレッシュな驚きであった。最も、この頃、学校教育の現場では、かなりばらつきがあったようで、以上の話はあくまでも、私の大阪府豊中市での体験である。

この頃は、建築の設計・監理に携わるのが建築家という認識、今ほどには社会に定着していなかったのではなかろうか。学校出たての私達が、私は建築家と胸を張って言うのはちょっと気がひけた。じゃあ何と言っていたのか、やっぱり建築家と言っていた。でも少し恥ずかしげに小声で、建築家をめざして頑張ってますといったニュアンスを込めて言っていたように覚えている。建築家の“家”の意味にこだわりのあった時代、言葉を大切にした時代、あの恥じらいの気持ちを、戦後日本の経済発展のうちにどこかへ置き忘れてしまったのは残念である。

この時期、建築家にとって大きな出来事は、1950年の建築士法の制定である。これが建築家にとって、資格制度の第一歩であることは間違いないとして、これではまだまだ不十分と、真の建築家資格制度の確立を目指す運動が、旧日本建築家協会を中心に始まった。この運動、今日に至るも継続中ということは、日本の建築家の職能、いまだに確立されていないとも言える。そうはいっても、ちゃんと、建築活動、設計・監理行為がスムーズに行われているではないかとの反論もあろうが、あちこちに綻びが目立ち始めたのも事実。昨今何かと話題にあがるさまざまな建築の欠陥、制度の綻びとも無関係ではなかろう。

一方、国際化が進むなかで、建築士という資格、諸外国の建築家制度とずれていることがはっきりとしてきた。なんとかしなくてはという、これも外圧だろうか。ただし、この外圧、明治以来の欧米に追いつけ追い越せといったかたちのこれ迄の外圧とはちょっと違う。いつのまにか、日本だけが世界の趨勢に遅れをとっている。このままでは、近隣、東アジアの国々ともイコールパートナーとしてのお付合いがむつかしい。このまま放うっておくと我が国だけが孤立なんてことにもなりかねない。

あれやこれやで、建築家資格制度の確立へ向けての建築各界からの動き、ようやく実を結びそうな気配の感じられる昨今である。このうねりを大切に育ててゆかねばならない。それには、まず、原点に戻って、建築家をきちんとみつめるところから出発すべきだろうが、バブル以後、なんとなく建築家という言葉が、ファッショナブルな響きで一人歩きしている。芸術家のようでもあれば、技術者のようでもある。その中間点にあるというか、両者を兼ね備えているというか、そのあたりのファジーなところが、若い人々に受けているようだ。建築が、建築家がようやく人々に認知されてきた証拠、いいんじゃないのと放っておくのではなく、この機会に、建築という行為、その中で建築家の占める役割、つまり建築家の職能をきちんと分かっていただくべくアクションを起こさなければなるまい。

あらゆる分野共通のことだが、明治維新、敗戦、そして今回のバブル崩壊と、3度目の近代化のチャンスである。これまで、2度の近代化が、欧米に追いつけ、追い越せというスタンスであったのに対して、今回の近代化は、気が付けば、日本だけが世界の孤児といったことのないよう、アジア各国をも視野に入れて、グローバルなお付合の環に加わることにある。ここで大局を見誤ってはならない。スピードも大切である。

建築家の職能

建築家の職能は、建築の設計・監理。職能の定義はこういうふうに単純明解な方がいい。いろいろと付け加えてゆくとだんだん分かりにくく、根本のところがぼやけてしまう。とは言うものの、建築、設計、監理、それぞれの内容が多様化、複雑になってきている。建築家たる者、それらの内容はきちんと掌握しておかねばならないが、ハードな面に関しては、勤勉実直な日本人のこと故、細かく丁寧に整理整頓、定義していくから、見落としさえしなければ心配はない。そこへゆくと建築のもうひとつのソフト面というか、芸術的な側面に関してはそう簡単にゆきそうもない。芸術を測る、計量化することはむつしかい。表意文字を使う私達にとって、それは不可能ではないかと思われるほどだ。

建築士の制度、そこのところをうまく避けて、技術のレベルだけを押さえている。だから建築家の資格制度というよりは、建築に技術的な側面から関係するすべての人々—技術者といってもいいでしょう—の資格制度になっている。建築家の資格を云々するには、この制度ではむつかしいということになるが、戦後焼野ヶ原からの再建という場面では、建築関係者の技術的なレベルをそろえて、質を確保したという点、高く評価されねばなりますまい。しかし、この制度も50年。今の時代にふさわしい建築家を含めて、多様な建築関係者の様々な資格制度が求められている。それも早急に……。

建築を、芸術的な側面から論じる。その基本、根本のところは何だろう。ここまできて、この文章ストップしてしまった。考えると限りがないが、結論を先に書くと、芸術とは人格である。この一言に凝縮されているといっていいでしょう。私の思考の結論ではない。考えあぐねて、TVをつけたところたまたま横山大観インタビューのシーン。古いモノクロの画面の中で続けて2度、「芸術は人格である」と力強く語っていらっしゃった。その一言をそっくりそのまま引用させていただいた。ル・コルビュジエの「建築家は建築家で

ある前によき市員たれ」という言葉等も、同様な発言と受けとめたい。

芸術は人格となると、人格を律するのは倫理、やはりここへ行き着く。「瓜田に覆を納れず、李下に冠を正さず」これが倫理の基本、人格の形成の第一歩はまずこの言葉から。その実行には、「至誠に悖(もと)るなかりしか、言行に恥ずるなかりしか、気力に欠くるなかりしか、努力に憾(ひる)みなかりしか、無精に亘(わた)るなかりしか」という海軍の五省なども、いい参考になる……。こういう調子で論を進めていくと、必ずといっていいほど、そうは言っても負けたじゃないかと、反論がでてくる。要は人格、単に五省を唱えているだけでは駄目ということなのだろうか。平生から常にそうあるべく努力する。そんなことをしていては、この厳しい時代、生きてゆけませんよとの意見もあろうが、理念と現実、その間の葛藤、悩み、恥じらい、こういったことども、建築の創造、つまり建築家にとっては、一番大切なことと信じている。

これを資格制度の中にどう取り入んでゆくか、難しいところだが、3度目の近代化の真価を問われるところである。

建築家の責任

建築家の職能があれば、当然ながら、それにともなう責任がある。避けて通れない。建築が、これほどに多岐にわたり多様化しつつある今日、責任の問題、どうとらえるべきか……。

例えば、あの自動式回転ドアの場合、メーカの製造責任とビル側の管理責任とが話題になっているが、ビル側のトップも事情聴取されているやの新聞情報もある。となると、建築家の責任はどうなるのか、一考を要する問題である。責任にも様々なかたちの責任があるが、ここで言う責任は法的なもの、責任を取らねばならない立場というものがある。設計事務所の創設者、管理建築士がその立場にある。となると、それ以外の立場で建築の設計・監理にたずさわるスタッフは、極端にいうと、一般論としては建築家であっても個々の仕事では建築家とは言えない。何故とならば、仕事の結果について責任を問われないからというような議論もなくはない。

同様な責任問題、大学の先生方の場合にも、考えようによっては、より深刻な問題である。兼業規制が緩和されつつあるとはいえ、国公立の先生方は創設者管理建築士を兼ねることはまだまだむつかしいようだ。その結果については、繰り返しませぬが、スタッフの場合よりもはるかに大きな問題を抱えていると言っていいでしょう。こんなふうに書いたからとて、夢、私が先生方の設計・監理参加に反対しているなどと誤解なさらぬように。私はプロフェッサー・アーキテクトの設計・監理業務への参入大賛成。建築界にとっても大きなプラスなんてことは、今さらここで云々する必要もありますまい。それだけに、ちゃんとしたかたちでの仕事にしてほしいとの思いがある。

以上、責任に関する2つの事例、いずれもそう簡単に解決できる問題ではないこと百も承知の上で、だからこそ、解決へ向けて活発な議論を期待したい。

おわりにかえて

以上、建築、建築家に取って、今、論じなければならないこと、今、解決しなければならないことを思いのままに書かせていただいたが、最後に、未来に目を向けて、毎度のことながら、巌本善治編「海舟座談」の序を引用させていただく。

＊

むかし魏の文候　扁鵲（中国戦国時代の名医）に向うて曰く、「君が兄弟三人あり、誰が最も善く医をなすや」と、扁鵲答えて曰く。「長兄の病を看るや、その神を視る、いまだ形跡あらざるに早くこれを除くをもって、その名、家の外にすら聞ゆることなし、中兄の病を治するは、毫毛に入り、その根本を癒す。故にその名や、聞ゆれども一地方より出でず。扁鵲のごときは、血脈を鑱り、毒薬を投じ、肌膚の間に副うてこれを治するをもって、処法華々しく、名、諸候に及ぶまで聞ゆるなり」と。およそ、家を看し、国を視る、なお人の病を察するがごとし、俗医、偽医、驕医、学医、名医、紛々として存す。余が、海舟先生に歎服措かざる所以のものは、その能く神に視て、いまだ形跡あらざるに治療するの識と徳とに存す。

＊

文中の「医」を「建築家」と読み変えてみると、これからへ向けて見えてくるものがあるのではないだろうか。さらに、海舟先生を建築家と置き変えてみる…。これはむつかしい、考え込んでしまう。建築家という仕事、有史以来、扁鵲的存在であったのではないか。それが今日、一大転換期を迎えねばならない状況に立ち至った。中兄のごとくというところまでは、鞍上人なく鞍下馬なし、の文言を思い浮かべて、なんとか理解できなくもない。長兄の域はまだまだとしても、これからの建築家それぞれに長兄を見据えて建築を考えていく。このスタンスを継続実行してゆくことが大切。ひょっとすると、建築家が地球の命運を担う。人類史上初めてのことである。まさしく正念場、奮励努力の秋である。

（おおた　たかのぶ　坂倉建築研究所代表取締役・大阪芸術大学教授）

総論2

21世紀の社会と建築家

馬場璋造

これからの建築家の社会的役割を考えるためには、まず21世紀の社会と都市がどうなっていくかについて考察する必要があろう。といって壮大な文明論を述べるわけにもいかないが、私がいま考えている20世紀を枠付けていた3つのキーワードの終焉について考察することによって、21世紀の社会と建築家の関係、建築家の役割が浮かび上がってくればと思う。それは「拡大主義の終焉」「グローバリズムの終焉」「抽象主義の終焉」である。

拡大主義の終焉

20世紀最大のテーマは拡大主義であった。科学技術の爆発的発達、それに基づく経済の発展、平等主義の敷衍、当然、個人的所得の増大もそれに伴なった。国際的に見れば異論もあろうが、少なくとも日本はその路線を歩んできた。20世紀前半は欧米に追い付き追い越せの拡大主義であったし、第2次世界大戦後は経済の発展による拡大主義が国全体を支配していた。事実、所得倍増政策を例に挙げるまでもなく、日本の経済発展は目覚しいものがあった。

所得の増大による国内マーケットの拡大に加えて、アメリカをはじめとする海外マーケットも着実に増大し、その限界を意識することはなかった。1972年に発表されたローマ・クラブの「成長の限界」は衝撃的な指摘であったが、その衝撃も一時的で、現実の成長の前には頭の片隅に置き去りにされ、1973年と1979年のオイルショックも乗り切り、そして世紀末、1991年のバブルの崩壊まで、拡大主義は国是といってもよいほどに日本を支配していた。

バブルというのは文字通り、実勢を超えた泡脹れの虚像であった。バブル景気というのは1986年11月から1991年11月と規定されている。バブルの崩壊はその泡脹れが弾け、等身大に戻るということなのである。人間の成長に子供の成長と大人の成長の違いがあるように、量的な経済成長もある程度に達したならば、子供の成長から、背も伸びなければ体重も増えない、しかし質的に豊になる大人の成長に転換しなければならないのである。

建設で言えば、日本のDGPはアメリカの2分の1であるのに、最盛期はアメリカの年間建設投資額を超えていた。アメリカは今でも年間約80兆円の建設投資額であるから、日本は40兆円が似合いなのである。平成16年度で約52兆円の建設投資額というのは、アメリカとは情勢が違うといっても、まだまだ多過ぎる。

拡大主義の時代は、マクロに見ればもう終焉したのである。それなのにまだ量的な成長率で経済を見る目が支配的なのは、歴史的認識が誤っていると言わざるを得ない。

しかし量的拡大は終ったとしても、建築家の時代はまだこれからである。質的に豊かな大人の成長の時代を目指すところにこそ建築家の出番がある。量的拡大に固執する過ちを正し、大人の成長の方向に導いていく建築家の役割がより重要になるのである。

グローバリズムの終焉

大量生産、大量消費とともに、世界的スタンダードの画一化、いわゆるグローバリズムが言われはじめた。効率的に規模を拡大するためには、世界的に規格が画一であることが有効だと考えられたのである。グローバリズムはアメリカン・スタンダードに過ぎないと言われることがあるが、それは半分しか当を得ていない。アメリカの強引さはあっても、何らかの規格に統一することがグローバリズムの目標なのである。質ではなく量を基準とした流れのなかでは、いちばん量の多いアメリカが基準になるのは当然といえる。

とくに情報化社会の進展は、グローバリズムに輪を掛けた。世界中どこにいても必要な情報が入手でき、交信することができる情報のツールに関しては、グローバル・スタンダードは確かに有効であり必要である。グローバリズムの終焉といっても、情報のグローバル化が終ることを意味はしない。インターネットは21世紀の文明の利器となっている。また世界中容易に旅行することができる交通手段の発達、機会の増大はまだまだ続いていくであろう。

しかし一方そのソフトは、ウインドウズにしても、大抵の国においてはその国の言語に翻訳されて通用している。言語の違い、気候風土の違い、歴史の違い、文化の違い、人種の違いは、情報化社会が如何に進展したとしても、同一化することはない。むしろ情報や交通手段の発達が、世界はひとつではないと気付かせてくれたといってもよい。そして差異こそが価値であると認識されるようになったのである。問題はグローバリズムでは律しきれないものまでグローバリズムで律しようとしたところにある。

だから画一化の限界を知ったいま、グローバリズムですべてを推し進めることも終焉を迎えるべきなのである。

とくに文化は、グローバルと言う考え方で捉えるべきではないということである。それぞれの地域がそれぞれ独自に育んできた文化を再認識し、お互いを尊びながら切磋琢磨して共に生きていくことの重要性を学んで、そのための手段を構築していかなければならないのが21世紀である。黒川紀章の説く「共生の思想」はまさにその指摘であり、建築界を超えて社会的・国際的に共鳴を得ているのもそれ故である。

建築における設計、とくにデザインにおいては、その先端はすでにグローバリズムを脱却しているといってよい。安藤忠雄が世界から注視されているのは、近代的材料と技術を使いながらも、日本独自の精神風土がその根底にあると感じられているからである。

デザインに留まらず、材料や構法、設備システムなどにおいても、日本の環境に基づいた視点が、日本の社会においてはもとより、世界的にも求められていることを知らなければならない。そして日本の都市や農村、自然環境にいたるまで、グローバル・スタンダードではなく日本独自のスタンダード、いや、その地に相応しい技術とシステムで再編されるようにならなければならないのである。

抽象主義の終焉

20世紀を支配していた考え方のひとつに抽象主義がある。

それは大量生産の要求に適し、また合理化・経済化を標榜する時代精神に合致していたからである。ひとつひとつの意味を質し、それに相応しい形態を付与するよりも、同じものを大量につくり出すためには、できるだけ省略化した抽象形態がふさわしいのである。

抽象とはいわば、すべての形態を幾何学形態に還元することである。単純な幾何学形態の組み合わせで表現することは、ものの持つ意味を捨象することであり、とくに工業製品は無名化の方向に向かった。デザインという言葉は、如何にすぐれた抽象形態をつくり出すかを意味するようになった。デザインではプロポーションや色彩は厳密に検証されたが、自然界の持つ微妙な有機的形態や色合いは、遠い存在となっていった。

建築も抽象主義に無縁ではない。近代建築は、それまでの装飾豊かな様式建築を捨て、大量に、安価に、すばやく建築を供給することを使命とした。手間の掛かった様式建築からの離反は抽象芸術と同じ志向であったが、建築はすぐに工業化の波に呑み込まれ、工業化を利用するより工業化に利用されるようになってしまった。コンクリート、鉄、ガラスをはじめとする無機質の材料の大量供給がそれに拍車をかけた。２ＬＤＫに代表される公団住宅や、ガラス・ファサードのオフィスビルなど、その典型的例であった。日本中どこでも同じような抽象化された建築がつくられていったのである。

発展する近代社会が建築に対して要求した膨大な量に対処するためには、時代の流れとして抽象化は正当な解決策ではあったかも知れない。ただそれとともに工業製品でつくられるようになった建築は、不動産ではなく耐久消費財になってしまった。そして工業生産品と同様に、技術の進歩に対応してスクラップ・アンド・ビルドされることが近代建築の宿命となってしまったのである。

無機質材料でつくられる抽象形態の建築がまちを覆い尽くすようになると、まちが味気なくなった。それは耐久消費材になってしまったことで、建築の尊厳が失われたからである。同時に周囲を顧みない誤った個人主義による建築の跋扈が、街並みの混乱に拍車を掛けた。しかし次第に、その過ちを人びとは感じるようになった。そして建築の社会ストックとしての重要性が再認識されるようになり、建築が耐久消費財から不動産へと再浮上してくると、抽象化する意味は失せてきたといってよい。それでなくとも建築家は、同じような建築でもそれぞれ設計に工夫を凝らし、抽象的形態を用いながらも、画一化を目指す抽象主義の本義に反することを本能的に試みていたではないか。画一化を計ることと差異化を計ることの矛盾のなかで、建築家は設計を行っていたといえる。だから抽象主義の終焉は、建築家にとって本道に戻ることなのでもある。

新しく目指さなければならないのは、21世紀にふさわしい建築の価値を社会的に確立することであり、それは建築の尊厳を回復することである。そのためには、建築を具体として捉えなければならない。それは時代と社会、そして建築主のために、建築の尊厳を固有的に表現しなければならないことである。それは直ちに具象的モチーフを建築に導入することを意味するものではないが、装飾を含めて具象的モチーフはその有力な手掛かりであることを視野に入れなければならないであろう。そして建築が抽象主義から脱するための新たな思想と理論と手法を用意しなければならないのである。

21世紀はどんな社会か

３つのキーワードの考察を敷衍していくと、どのような21世紀の社会像が浮かび上がってくるだろうか。

まず拡大主義の終焉で乱開発が静まり、生活環境に落ち着きが取り戻されると、コミュニティの問題が浮上してくるのであろう。

20世紀に新しい社会のコミュニティの構築がいわれたが、それは幻に終った。流動化を続ける社会ではコミュニティは崩壊し続けるしかない。流動化が静まれば、近隣でのコミュニケーションが活発になり、コミュニティは自然と回復してくる。コミュニケーションがコミュニティをつくるのである。これまでコミュニティの必要性を説きながらも社会の流動化、コミュニティの破壊に力を貸していた建築家に、コミュニティを構築する機会がくる。しかしコミュニティの構築は一般論ではなく、その場に則して考えなければならない。コミュニティは外からつくられるものでなく、自らつくるものである。建築家や都市計画家はこれまで抽象的に新しいコミュニティの必要性を唱えてきたが、これから本気でその構築を計る時機になり、現実の課題として取り組まなければならなくなる。

そして人口の定住化が進むと、コミュニティからまちにいたるまで、「成熟」がテーマとなってくるであろう。それが発展を目指さない豊かな社会へと歩を進めていくことなのである。

またグローバル化の波が静まると、地に付いた自分たちの住む場所のあり方に目を向けるようになる。生活施設も、他にあるからこ

こでも欲しいというのではなく、自分たちが本当に欲しい施設がコンセンサスを得て求められるようになる。それがコミュニティが成熟した証拠である。そして住居でもビルでも公共施設でも、建て替えるときには環境をよりよくする建築を心掛けるようになる。

そうしてつくられる社会環境は、抽象的なボックスが建ち並ぶのでもなく、近所迷惑なデザインがお互いに自己主張するのでもなく、周囲の環境と呼応しながら、このまちに住んでいてよかったと心から思えるような誇りの持てる個性のあるまちを目指すようになっていく。個々の建築もコミュニティと建築主の志向性を反映した豊かな個性を持ちながら、まちの環境構成に寄与するようになる。そしてそれぞれのコミュニティの独自性を求めて、コミュニティ間の好ましくも微笑ましいさまざまな競い合いが盛んになってくる。

技術も停滞するわけではないが、成長を目指す技術と成熟を目指す技術とでは、技術の性質が変わってくる。建築においても新しい革新的な技術より、改良、積み重ねによる洗練された技術にウエイトがシフトしてくる。技術に人間性が呼び戻され、汎用的な技術は限定されてくるようになるであろう。

だからといって社会が沈滞し閉鎖的になるのではない。テレビやインターネットなどによる情報の交流はさらに活発化し、旅行も盛んになるであろう。地域での自給度は高くなるが、物流の世界的な交流もさほどは減速しないであろう。その一方で自分が住んでいるところ——住居からコミュニティ、まちまで——への愛着が強まり、その環境の質的向上を皆が望むようになるのである。

こう考えていくと「中世」がアナロジーとして浮かんでくる。中世とはヨーロッパでは5世紀から15世紀ごろまでを指し、日本でいえば鎌倉・南北朝・室町時代である。かつて中世は「暗黒の時代」といわれ、逼塞し発展のなかった時代だと言われていた。しかし歴史考証が進むにつれ、その認識は多くの面で過ちであることが明らかになってきた。それぞれの地域で、それぞれのまちが内的充実を計り、成熟した社会が実現したのが中世なのであった。ここで指摘した3つのキーワードは不思議と、いずれも中世を向いている。

かといって時代が中世に戻るのではない。社会の流動化が静まることで、中世的側面が多く見られる社会になって行くということであろうか。人間は定住するようになるが旅行もし、情報と物は自由に交流するという構図である。定住するようになれば人びとの意識が変わってくる。居場所を愛するようになってくるのである。

シンボルの表現

20世紀に建築家が放棄していたひとつにシンボルの問題がある。

近代建築はシンボルを拒否した。近代化はより多くの建築を、より安価に、より多くの人びとに供給することを目的とした。そのためシンボルは不要であり、近代化・平等化の妨げになると考えられた。それよりもシンボルは権威の表現であると槍玉に挙げられた。シンボルは近代化の格好な敵に仕立てられたのである。しかし時が経つにつれ、その感覚は薄れ、なによりも社会が新しいシンボルを求めるようになってきた。日本万博のお祭り広場に立ったシンボルタワーに異議を唱えるものはいなかった。それなのに建築家は、まだ近代の呪縛に囚われ、シンボルの再建に取り組もうとはしなかった。続々と建てられるようになった市庁舎や文化施設も、社会はシンボルを求めるようになってきているのに、建築家はそれに真正面から向かい合わず、中途半端な造形でお茶を濁してきた。シンボルは人間社会の本能的欲求のひとつであり、それを建築でどう扱うかは、まちの造形を司る建築家の本来的役割ではないか。

もちろん権威の象徴としてシンボルを再現することはないし、大上段に構えることもない。新しい時代、新しい社会にふさわしいシンボルのあり方を考えることが必要なのである。

公共建築に限らず、個人の住宅や集合住宅でもシンボルは必要である。それは個性の表現であり、人間の尊厳の徴なのであり、それがシンボルなのである。ヨーロッパの古いまちでは街並みの調和を保ちながらも、家のひとつひとつの外観にささやかな装飾を付与して、それぞれの特徴を持たせている。個人的ささやかな表現の積み重ねがまちの尊厳となり、魅力となっているのを見ることができる。

近代の建築家は、近代化を推し進める自負を持っていた。しかし目まぐるしく変転を続ける社会のなかで近代化の理念は空転するようになり、抽象操作は造形操作へと転化していった。造形操作ではその建築だけを特化することを考えるようになり、周辺環境との関係はあまり考えられなかった。その結果まちには自己主張の強い建築が入り乱れ、さらに街並みの混乱をもたらしたのである。

逆にシンボルの表現を考える時には、公共的なものであれ私的なものであれ、大であれ小であれ、周囲との関係を考えざるを得ない。特異なものだからシンボルになるのではない。周辺環境との豊かな対話として現代のシンボルは存立するのである。

新しい時代、新しい社会のシンボルのあり方に真正面から向かい合い、その表現に意を尽くすようになってこそ、建築家の役割が改めて社会から認識され、職能として尊重されるようになるのではないか。そのためにはシンボルを建築でどう取り扱うか、建築家が真剣に取り組まなければならない職能的課題である。

プロブレム・ソルビングを超えて

さまざまな技術、さまざまな設計条件、法規やコストが輻輳する

時代にあって、どのように条件を設定し、それを建築的に解くかということが求められている。それがプロブレム・ソルビングである。これが建築家の今日的課題であるように言われており、事実、大切な責務である。しかし条件設定自体が不定であることが多い現代において、それは安易な作業ではない。不定要素を切り捨てていけば問題は簡単で、明快な解答が得易い。ただその場合、実は大切な要素を切り捨ててしまっていることが多い。建築の尊厳をないがしろにすることや、建築の使い難さ、メンテナンスのし難さなどがその結果立ち現われてくる。そうではなく矛盾する要素を抱え込みながら、それを解決するのがプロフェッションの役割である。

それだけではない。建築主の提示する条件をクリアできればそれでよし、というわけではないのである。いうまでもなく建築主は建築設計のプロではない。建築主の条件設定自体に不備の可能性があると考えなければならない。レム・コールハースは、現代に生きる建築家は、クライアントの言うことを聞いてはいけない、とすら断言している。そして真に要求されるプログラムの設定にまで建築家は踏み込んでいかなければならないと説く。

建築主もそのことに気付きはじめている。自分の出した条件をクリアしただけの設計では満足できなくなってきているのである。提示した条件に答えるだけではなく、求めた以上のものを建築家が提案しなければ、プロとしての役割を果たしていないと考えるのである。建築主が思ってもいなかったような提案を行い、これこそ自分が求めていたものだ、と建築主に言わしめてこそプロなのである。

中世の時代、王侯貴族は画家によく肖像画を注文した。それをただ綺麗なポートレートとして描くだけでは、依頼者も画家も満足しなかった。内面的性格を浮かび上がらせたものや、背景と言うよりも絵画全体のなかに、依頼者を思ってもいなかった姿で描き出したりもした。そうした絵が名画として多く今日に残っている。

建築が時代と社会と環境の産物であるとするならば、建築主がそのすべてに正しい認識を持っているとはいえない。それを正し補正するのも建築家の社会的責務である。単なる問題解決ではなく、その背後に潜んでいる問題までを捉え、トータルでの創造的解決をすぐれたデザインとともに示すことが、これからの建築家にはより強く求められるのではないか。

連歌師としての建築家

定住化が進み、街並みが落ち着いてきたとしても、中世のような同じ材料、同じ技術でひとつのまちがつくられ、まちの景観が回復するとは考えられない。これからも街並みはダイナミックな変化を続けていくと考えなければならない。街並みには到達目標の姿があるのではなく、つねに進行中が真の姿である。そうした街並みに建築家がどう関わり、変化の中での街並みづくりに寄与し、街並みをよりよくしていくかが、これからの課題となる。

日本の中世、連歌が勃興した。連衆で座をつくり、575、77と繰り返し詠み続ける。前の歌の趣意を受けながら、趣意を転じて次の歌を詠まなければならない。繋がらないが繋がっているという、変化自在な関係である。ほかにもいくつかルールがあって、ルールに合っているか、その座にふさわしい歌であるかを判断するのが連歌師である。余談であるが、江戸時代の芭蕉も旅をしてのなりわいは連歌師であった。有名な句にも連歌の発句が多い。

ひとつの街並みを連歌にたとえれば、そのなかに新しい建築をつくることは、既にある連歌の一句を読み替えることである。つまり向う三軒両隣を配慮しながら、そこに新しい建築が建て替わることで、街並みがよりよくなることを建築主と建築家が連衆のひとりとして考え、その成果を他の連衆と連歌師に示す。連歌師は市や町、コミュニティからの依頼を受けた別の建築家である。その検討、判断を経て建築は実現する。これが恒常的に行われることにより、街並みはダイナミックに変化しながらも、さらに豊かになり楽しくなる。そして街並みの変化は留まることがない。この連歌師の役割をタウン・アーキテクト、シティ・アーキテクトと呼ぶ。

これは建築家が設計だけでなく、すぐれた街並みを保持していくための役割を持つことを意味する。建築家はときには設計者になり、ときにはシティ・アーキテクトになる。それは建築家の職能の拡張をも意味する。自治体やコミュニティが、自分たちの街並みを向上させるためのタウン・アーキテクト、シティ・アーキテクトを必要とするようになれば、その需要は膨大になるであろう。

ただシティ・アーキテクトに選ばれるためには、芸術や文化に対しての造詣が深く、まちづくりに対しての見識が社会から認められなければならない。建築家はすべからく、そのための努力が必要である。これからの建築家の必須条件である。

建築家の職能の確立を声高に叫んでも、それは一般社会からは権益固守の運動として見られるのが落ちである。そうではなく、これからの社会のあり方を一歩先んじて考察し、その社会において建築家の果たすべき役割を見出し、それを実践していくことによって、建築家の社会的地位は自ずと確立されていくのである。

ここに挙げたいくつかの例は、その一部の考察である。近代を超えた成熟の時代における建築家の役割は尽きることなくある。

（ばば　しょうぞう　建築情報システム研究所）

各論1

精神への偏愛

柏木浩一

私には悪い癖がある。「精神への偏愛」とでも言うべきものだ。

建築を「人が鮮やかに今を生きるための器」と定義し、二元論という虫メガネを通して眺めてみる。そうすると、「床、壁、天井、什器などが織り成す物質の様相（建築の物体的側面）」と、「それらに呼応して人が心を変容させる様相（建築の精神的側面）」の二つが浮かび上がってくる。その、精神の方に私のすべてが向かってしまう。偏愛である。

そんな調子だから、クライアントに、よほど注意してかからないとヘマをやる。物体としての要望をお聞きしているはずが、その奥に見え隠れする精神に、知らぬ間に気持ちがいってしまう。例えば、「独立性の高い個室が3つ欲しいわ！」と言われると「この室の繋がり方で、ストレスが溜まったとき気晴らしができるだろうか……」、「ピクチュアー・ウインドウが欲しいわ！」と言われると「この窓の形式と庭の繋がり方で、病に伏せたとき果たして心が癒されるだろうか……」、「寝室も大理石の床にして欲しいわ！」と言われると「ご要望の床材で、病んで末期、未だ今を生きているという実感を持てるのだろうか……」。何も普請に燃えるクライアントを殺さなくともいいのだが、私の設計する建築を使用する人すべての心の動きに、次々と興味が移っていってしまう。困ったことに、クライアントに向き合いながら、うわの空ということになるのである。

この姿勢は、今日の「建築家のあるべき姿」としては、どうもまずいようである。18世紀末から19世紀中頃までにサー・ジョン・ソーンらによって確立された近代建築家像に照らし合わすと、「建築の物体的側面」を軽視しクライアントの直接的な利益を優先させないのは、論外。職能上の不適格者ということになるからである。だが、過去200年にわたりそうだったといって、未来永劫、建築家像は変わらないものなのだろうか。

歴史の中に建築家像を俯瞰すると、まず、2000年前の『ウィトルーウィウスの建築書』にある「建築家の理想像」。それ以降、「実技の考究者であり秩序に精通する理論家」、「神学にも通じた知識人」、「深い教養をもつ芸術家」、今日の「民意の代弁者であり環境の擁護者」と、時代の要請に応じてその装いを少しずつ変えてきている。では、次の時代の「建築家の装い」とは、何なのだろうか……。

今日という時代は、心の病んだ人たちが氾濫し増加し続けている。大きくは、宗教戦争や民族紛争がもたらす、人間不信、報復テロへの恐怖、心傷性ストレス。小さくは（本来、心の問題に大小はないのだが）、日常生活のストレスが引き起こす自殺、キレル、ひきこもり。「21世紀は心の時代」と言う人もいるくらいである。この時代性を勘案すると、建築家の職能と価値も無関係ではありえない。もっと「建築の精神的側面」に重要性が増してくると思う。

失敗を恐れず予測すると、次の時代の「建築家の装い」は「環境人間学に精通した人」のような気がする。唐突に環境人間学という未だ定義の定まらない学問を挙げたが、その中の「環境（ここでは人の器としての建築）の物体的側面」と「難解な、人間の精神の領域」を調停する能力分野である。

「環境と人間を調停する能力」とは何か。例を二つ挙げてみる。

一つは、「人間が環境に希求するものを読み解く能力」である。クライアントとの係わりを通じて「環境としての要望」に潜む心の深層を探りだす。その精神分析的行為を通じて抽出した問題点を、より健全なところ、人としてより普遍的なところに導くような「環境にかかわるアイディア」を具体的に提示し、精神・脳科学の知識を駆使して説得していくという能力である。

もう一つは、「人の希求するものを充足するように環境を変換する能力」である。精神分析ができたからといって、それを物体に置き換える技をもたなければ、建築家の職能にはならないようである。一例を挙げると、プランニングにおけるサーキュレーション＋シークエンスの技法。サーキュレーション（循環。円をつくることが原義）とは、古来より経験的に、人を循環的に歩かすことで小さな建築を大きく感じさせる手法として使われてきた。歩行距離を長くすることで脳の血流量を増加させ、精神が高揚する素地を創るのである。この循環経路に「障壁」などの視界を遮る建築装置を意図的に配置し、その向こうに見え隠れの何かを存在させて光や草花など移ろう自然の要素を加味する。そうすると、人は遮られて見えない所に意識が引き寄せられて自ずと動きが誘発される。人が動くと景色が変化し、次の新たな景色が出現する。また、そこに遮られて見えない所……。意識、動き、意識、動きと「尺取虫の動き」のように次々とシークエンス（連続。後に従うものが原義）が起きていく。その、建築装置が織り成す世界に意識を奪われ続けているあいだ中、その人は鮮やかに今を生きていることになる。この例では、環境を変換することで、人の根源的欲求までもが満たされている。

少し脇道に逸れた。建築家の職能と価値に関し、「建築の精神的側面」の重要性が増すことは説明できたと思うが、建築家職能の根幹が「建築の物体的側面」を設計監理することにある限り、私の「精神への偏愛」を正当化するのは難しいようである。しかし、私にとって、設計行為のすべてが「人が鮮やかに今を生きる器」創りに帰着しなければ、意味が無い。「建築の物体的側面」は、高度情報化のなかで、いずれ機械的に押さえられていく運命にあるのかもしれないのである。

悪い癖と知りながら、「精神への偏愛」は当分断ち切れないと思う。

（かしわぎ　こういち　建築家・兵庫県立大学環境人間学部教授）

「建築家」とは何か

遠藤秀平

悩ましいテーマだと思う。少し退屈であるが歴史を振り返ってみたい。なぜなら建築家とは古く歴史的産物であるからだ。

人々は時と場所を選び多くのエネルギーを建築物の実現に費やし、必要の満足と記憶の拠り所としてきた。住処に始まり、集合する空間、宗教の場、権威を表現する建築物、もちろん安全／防衛そして経済活動のためなど、世界遺産のリストをみても明らかだ。このことが歴史上、建築家を生み出した背景に間違いなく、この延長上では建築家とは建築物を作った人となる。もちろんその意味はいつも時間の経緯と共に変化してきたが、改めて建築家とはなにかとなると作っただけではないと異を唱える人は多いに違いない。その時に片付けるべき疑問として、歴史上のどの時点から建築家は現れ、作ったとはどんな行為を指すのか。この問いと疑問に対しては作ることを複数回行う行為、他者よりも正確なシミュレーション能力を獲得し他者の期待に応える時点からとしたい。また、作るとは完成されるべき状態を予測し、その予測に基づき建設のための物理的手段を準備し建築物を実現する行為とする。古代エジプトでは、この予測能力には大きな権力と責任・ペナルティーがあったことは個人の活動が前提であることを示す重要な記録として残っている。

そして今建築家とはなにかと問う背景にあるのは、何かが必要でなくなる時に存在価値を明らかにしたい衝動が生まれる歴史の必然ではないだろうか。現代では安心や安全は建築物以外でも提供可能であり、宗教も権威も建築物を利用しないことが多い。なぜならより大きな建築物、より豪華な建築物は経済活動の副産物として利用され、その効果が変容してしまったからではないか。そして、いま誰が何をもとめた結果、建築家は存在するのか。

特に日本において状況はより一層複雑である。建築家の概念そのものが外来で、それも100年程の新着の概念である。この外来の意味を咀嚼し受容するいとまもなく、その存在基盤が大きく変容しはじめている。歴史的意味は仮に上述した内容だとすれば日本の歴史的文脈においても『建築家』の慣用／運用は可能であろう。つまり、棟梁や庭師・茶人を拡大解釈することも可能である。しかし、ことはそう単純ではない。現代社会で運用されている建築家にはもうすこし複雑な使命が期待されているようだ。それは、物理的構築物の可能性と新たな空間体験を追求し、未知なる価値の共有を生み出すことにあると考える。

また、戦後の日本は極端に多くの建築物を実現し、壊しまた作り続けてきた。その結果、もはや多くの建築物を必要としなくなり、建築家も実現する機会を失いつつある。片一方でコンピュータシミュレーション能力の驚異的進歩により、もはや物理的に建造せずに満足感（視覚的）を得ることが可能となっている。ここで、前述の定義「物理的手段を準備し建築物を実現する行為」を変えなければならない。なぜなら、我々は新たな空間（バーチャルスペース）を獲得し、共有することを可能としたのである。物理的すなわち地球上の制限を取り払う情報を生み出した。大切なのはその情報を複数他者と共有できることに集約される。この新たな認識と視覚的体験を提供してくれるところに、従来の建築と相似形の形式があり、建築家の行為に近似している。

建築には物理的な技術がつきものであるが、ここではその技術は不要であり、シミュレーションソフトの操作技術と3次元プログラム構想力が求められる。

前おきが長くなってしまった。それもそうである、これから建築家はどうなるのか。多分だれも分からないのである。ただ、1つ言えることは明確に変化し、物質を伴わず、シミュレーションと調整が大きな役割になるようだ。しかし、なんと精神衛生上、不健康な役割ではないか。それと、日常の感覚で言えば経済的に報われるとも思えない。

ここまできて、大層悲観的になってしまったがしかたない。

このバーチャルスペースを手がかりとし建築物を作らない建築家はあり得るのか？もしあるとすれば建築家に似た違うなにかではないかと声が上がるに違いない。

新しい状況には新しい言葉が必要なようにきっと生み出される。しかし、その言葉が共有されるには多くの時間を必要とし、それまでは混同される状況が続くだろう。

そして、建築家が建築家でいるためにはやはり、物理的建築物を作る。そうすることで歴史的に存在してきた建築家の延長上にいることが許される。

最後に建築家とは、と問われる状況を考えてみたい。

歴史上の教訓として、欠乏や危機に瀕しているものほど多くとりざたされる。

今日の典型例が平和である、戦後より平和という言葉がこれほどまでに日本のメディアを埋めるのは9、11以前にはなかったのではないか。ここから考えられるのは、今日建築家が不足し、多くの困窮する人々が存在するからである。か？いやちがう。もうひとつの典型のほう、消え行くときである。弱小野球チームが吸収合併され、消え行くときに必要性が問われる。建築家の意義が日本社会に定義受容される前に消え行く運命にある。

後に残るのは、コンピューターを駆使し、シミュレーションと調整能力にたけたバーチャルクリエイターと、建築物による物理的共感を求めるほんのわずかの人たちのための建築家だけではないか。

（えんどう　しゅうへい　遠藤秀平建築研究所）

各論1

時を超えて

吉羽裕子

建築することの根源的意味について、ハイデッガーは、“建てる 住まう 考える”で根源的な実存構造を建てることと住まう機能とを関連付け、それら全体を実存の基本行為として捉える。また“物”において、集め来たらすという概念が根源的な重要性を持つことを述べている。このことは、空間は実存を確認するために存立していると理解される。

そして、クリスチャン・ノルベルグ・シュルツが“ゲニウス・ロキ”で、建築とはゲニウス・ロキを目に見えるように視覚化することであり、有意味な場所をつくり出すことにあると規定する。また“実存・空間・建築”で建築は実存的空間の具体化であり、実存的空間というのは人間と環境の間に成立する根本的な関係により成立するものであり、建築は人間に実存的足がかりを与える方策であると述べている。ゲニウス・ロキとは、ラテン語で“地の霊”であり、環境、景観、風土、地形、地質、植生、気候、あるいは雰囲気、などを包括したことを指し、またその地の歴史性、精神性をも含む。そしていわゆる“ヴァナキュラーなもの”は、その地その地で育まれてきた多彩な表現に満ちた文明を形成している。

建築は、このゲニウス・ロキ、場の特性を読み取り、その場の意味を構築して空間を作り出していくことである。この際、如何に場の特性を読み取るか、またその解釈に対していかなる意味を引き出し、そこに何を構築するかのテーマに基づき、そこに生み出される空間が建築となるのである。その新しく意味が決定された建築は新たな場として、それ以前の意味性とともに新しい意味を重積していき、さらにその場の歴史性を形成していく。

そして、そこに構築された建築が、場の解釈に基づいてその意味がどのように明らかにされ、どのように形作られているかによって、建築が建築として成立しうるかが問われるものである。その解釈と、どういう意味を引き出すか、さらにいかなるプログラムを導入して構築するかが極めて重要になる。そこに生み出された新たな建築が新たな意味を持って、如何にわれわれの内面に語りかけてくるか、われわれの心に響くかが、問われねばならない。

建築がひとのための空間である限り、建築がひとの心に響く空間としてあるためには、建築に不可欠な重要な要素がある。これまで述べてきたように、ゲニウス・ロキがその建築の存立するための構築の基本であるが、さらに“ひと”がその空間とかかわる建築である限り、基本要素として具体的なことがらをいくつか挙げてみる。

“自然”はこの地球上にもたらされる大きな要素で、太陽がもたらす光と熱のエネルギーと、地球を覆う大気がもたらす気、である。光は明るさをもたらし、その刻々と変化する性質と、それを如何に取り込むか、あるいは制御するかが、ひとにとって極めて重要で、建築的に多彩なデザインの可能性が潜んでいる。熱はひとが生存するために、その取り込みの方法によって、やはりさまざまな制御の手段が考えられる。気はひとの生命維持には不可欠であり、その気の流れは空間内におけるひとの快適性に大いに関与する。

“力”は建築と地球の引力との関係を表し、建築に力の流れが表現される。その場とその建築のプログラムにより構築的かどうか、力強さと軽快さなど、表現の手段となる。また建築には骨格が明確であることが重要で、その空間もしくは構造体によって表されるべきものである。

“身体性”については視覚的触感やヒューマンスケールが重要である。触感は建築を構成する素材によるが、素材のテクスチュアの持つ"もの"の存在感が建築にとって重要で、生命体であるひとがリアルなものの確かさを実感できる。スケール感については、空間の種類に応じて、その空間のもつ大きさがひとにとって空間の中での自身の存在感を感じられることが重要だと考えている。

“形態の要素”空間の三次元的形態の要素にはさまざまあり、拡がり 曲がる、くぐる、捩れる、貫ける、覗く、連なるなどがあり、空間のプロポーションに基づき、生命体の躍動が生み出す旋律の要素とどのように組み立てていくかが重要になる。

“空間構成”は間と間のつながりを指し、内部と外部、建築とその環境、建築と自然や建築と都市などとの関係性、融合性、親和性あるいは隔絶性などを三次元的にどう構成していくかが重要である。またその両者の間に存在する中間領域の作り方、またどのような結界、区切りを用いるかによってさまざまな建築空間が生み出される。

“時間”は建築が建築であることを認識するための要素である。経年による価値を蓄積し重層して、歴史性を持ち、さらに持続して、知恵や技術に支えられた文化を生み出し、景観を形成していく。

建築する場の個性を生かし、その魅力を引き出し、場に個性をもたらし、空間的には骨格のある建築、表現として力のある建築で、芸術的意図が明確に表現され、存在感のある建築、時代の変化に耐え、時間の重なりとともに蓄積され、文化として捉えられていくものであって、歴史的意義を創出することが理想である。

自然環境対応の概念を持つ自然軸、場としての芸術性の高さが永遠性をもたらす時間軸、街並みの景観的構成要素として蓄積されていく場の認識を社会軸として捉え、芸術的永遠性と物質的耐久性を求め、時代を超えていく建築をめざして、そのような建築を実現していくことが建築家の社会的責任だと考えている。

（よしば ゆうこ 一級建築士事務所Ｉ．Ｆ．Ａ代表）

建築家の役割

岡本　隆

設計にユーザーが参加する？　事の起こりは、ある福祉施設の設計に取り組もうとしたこと。心身に重度の障害をもつために、食事の仕方からトイレまで我々の日常と違う行動世界に住んでいる人々にとって、住みやすい空間、快適な生活とは何だろうかと思案にくれた。この分野に携わったことのある設計者なら誰しもが経験する戸惑いである。もともと建築家は建築「物」を作る専門職能ではあっても建築の中に展開される「生活」の当事者ではない。建物が出来れば立ち去ってしまう「外的」存在である。ならば、実際にそこで生活する「内部」の生活者との協働からその場のその生活を発展させる空間を作る手法はないか、そんな協働の手法を使えることこそ「プロ」ではないかと考え始めていた。幸い第二びわこ学園という福祉施設プロジェクトで参加型という新しい設計手法を開発していきたいという提案が、クライアントに共感を持って受け止められた。長い特異な設計プロセスが始まった。そこでは設計者は形を作って提案するのではなく、職員チームが議論を進める手助けにまわる。その結果がどこへ行き着くのか設計側が先取りしない。「はじめに答えありき」にならないようにたたき台を用意せず、参加者と一緒になってその場で（その前でもその後でもなく、その時に）作る。集中力と根気が要求される。難しいのは、あらかじめ答えを用意せずオープンな心でその場に臨むこと。一方、議論の手法については工夫を重ねた。どうしたら「素人集団」と一緒に空間を議論できるか？ツールは？議事の進め方は？試行錯誤を重ね、「プロトタイプ」づくりという方式を開発した。それは各部屋の関係を現すダイアグラムで、職員チームが自分たちの活動を思い浮かべながら、部屋の大きさ、部屋と部屋とのつながりなどを議論しながらカードを並べて決めていく。議論が進み実際にプロトタイプが出来上がってきたものの、ここで予想しない発展があった。何かがおかしいというチームの雰囲気｛プロトタイプ1｝。しかしどうしたらいいのか…。設計側が案を出してしまえば「参加して自分たちで作る」精神は失われる…。そこで立場を替えて職員が居住者（園生）になり代わり園生の視点で議論をする「視点の変換」を試みた。その結果できあがったプロトタイプⅡはそれ以前のプロトタイプⅠとは大きく異なる。比べてみて最初のものは、職員の目が届きやすいとか動線が短いとか、ついつい職員側の使いやすさに気をとられて、主役であるべき園生の生活の充実が二次的になっていると職員チーム自身が気づいた。そして園生の生活の豊かさのためには少しは苦労が増えてもいいと職員チーム自身が選択した。何を目指すかチームの共通認識ができ、園生の生活の豊かさを求めて特徴のある平面ができあがっていった。職員チームが自分たちの夢を自分たちでふくらませるかたちで。基本設計の承認プレゼは象徴的だった。普通なら設計者から建築主への説明となるところを、ここでは発注者の建設委員会に対し設計に参加した職員チームが設計案を自分たちの案として熱心に説明し承認を受けた。自分たちがこの案を作り上げたのだという熱意にあふれた光景であった。



第二びわこ学園鳥瞰

参加型設計は使用者どうしの共感作り　びわこ学園の経験から学んだのは、立場の異なる使用者どうしが、ひとつの空間、ひとつの施設を使うというのが生活の現実であり、それを前提として設計をはじめるべきだという点である。観察によると、使用者たちは普段は自分たちがある空間でしている活動を深刻に分析することはないし、自分の使っている空間に対する考えを明らかにする機会もない。参加型設計のプロセスでは、そんな使用者同士が新しい施設の設計という必要に迫られて否応なく行動を振り返り、思いを明らかにしていく。たとえば医師・看護師・生活指導員が各々の行動を振り返りながら施設の配置のあり方を議論する。緊急事態に走っていけるか？深夜の安全は？昼のくつろぎは？その過程はお互いの作業や立場に対する理解を深め共感が生まれる過程でもある（当然のことながら時間と忍耐力が要求されるが）。そこで生み出された結論は素朴であっても、前例がなくても、参加者が自分たちで自分たちに一番いい方法を探した結果なのだ。そして設計者はその議論を建築的に裏づけ励ます。こうして生まれた生活空間コンセプトは現実的であり、しかもこうありたいという使用者の希望を示すものとなる。生活と空間が同時に検討されているゆえに（たとえばこの食堂をレクリエーションの場としても使えるか？）空間には生活の裏づけがある。そしてこのプロセスの最大の産物は使用者同士の連帯感である。議論の末の「共感」をもって、その空間を積極的に使っていこうとする使用者集団が生まれる。

活動・環境を設計する　おおざっぱに締めくくれば、参加型設計という協働作業の中で使用者はその場の「生活」を設計する。建築家はそれに応える環境を設計する。こうして設計行為はいわば「もの作り」から「こと作り」へと昇華する。時間がかかり、根気がいる。プロセスを大切にしたいという発注者と設計者の強い意志があって始めて成立する設計手法である。それでもこの方式は「何を作るか」という根元の議論において施設利用者側と建設側が隔たってしまいがちな公共的な建物において、いわゆる「ハード先行」を脱却するための豊かな資源になると確信する。

（おかもと　たかし　株式会社日建設計設計室室長）

建築家の今 —建設会社設計部からの眼差し—

天野直樹

「建築と社会」誌からの依頼を受けて一文を書くことになった。建築雑誌「建築と社会」はその名のとおり建築を通じて社会とのかかわりを考察する、もしくは社会の側から建築を論じるといった、常に単体の建築の意味、価値、生成のプロセスをその取り巻く状況から問うという姿勢を貫いてきた。今回「建築家」と言うものをあらためて考えるに当たって、やはりここでは「社会」という言葉で代表される「状況」とか「時代」とか、もしくは「他者」とか「世界」とか呼ばれる、いわゆる建築家自身以外のものが「建築家」を外から規定すると言う意味でその変容を捉えてみたい。

元々の素朴な関係　中世以前の建築家の職能はその他の芸術家、すなわち画家、彫刻家、音楽家などと同じくパトロンとアーティストという関係からスタートしたと言われている。いわゆる宮廷画家、肖像画家であり時の権力者との一義的な関係、今流に言うなら「権力者満足度」とでも言うべきシンプルな基準で活動は行われていた。そういうパトロネージが関係の原理であり創作活動の動機であったとしてもその中で建築技術の発展、芸術としての発想なり探求は同時的に行われてきた。例えば劇場における見やすい客席の設計、見事な演劇空間のデザイン、プロセニアムの発展、遠近法を利用した舞台の実験等様々な進化を遂げながらも一方で皇帝のためのバルコニー席は一貫して場所を譲らないというようなことである。さらに言うならばその劇場空間を仔細に読み取れば、皇帝と演劇、皇帝と民衆（観客）、民衆と演劇という三つの関係がその順番どうりのプライオリティーによって成立している事がわかる。すなわち主体となる建築家は常に新しい発想と表現を目指してはいるものの、いつもその時代背景に絡め取られているという事実である。われわれは時代（社会）に投げ込まれながら、時代（世界）に何かを投げ返す存在であると言われる所以である。

2004年夏　では今はどんな時代であり、時代の変曲点にあるのか。資本主義と民主主義が一巡して100年、今やその上に立った自由主義が世界を一色に染め上げようとしている。ごく大雑把に言ってしまえばいくばくかの社会主義的修正を加えながらこの相対的優位の三つのイデオロギーが部分的軋轢を乗り越えて微前進していくことになる。少しスコープを小さくして20世紀後半を見てみれば、経済の高度成長を背景に小さな政府、民営化、規制緩和、市場至上主義、企業格付けに見られる過剰な保護政策からの脱皮、もしくは相対的弱肉強食化が進みいわゆる経済至上主義、効率至上主義が世界を支配した。バブル崩壊後はさらにこの傾向は徹底され建築は経済活動に深く関与し、スクラップ＆ビルト化されたり金融化されたりする一方である種の建築なり建築家はその世界から大きく距離を置く事になる。しかし今世紀に入って状況はまた少し変わろうとしている。環境保護、消費者保護、情報開示、説明責任、コンプライアンス等の自由競争の行きすぎに対する牽制、ＩＴ、グローバリズム、証券化、金融化によるものの平準化、普遍化により一つの世界に全てが組み入れられていくと同時に全ての価値観が複合、統合されていく。例えば企業にとって高収益という単一の目的だけではやっていけない。ちょっとしたプロセス上での判断を間違えただけで企業倫理が問われ会社の存続が危ぶまれる事態がいくつも発生している。長い間続いてきた企業の個人に対する相対優位が一部で逆転しようとしているのかもしれない。

クライアント（顧客）の顧客　今や発注者にとって建物の建設に対する投資判断は昔とは比べものにならないほど多彩な様相を帯びている。いつ提携するかわからないライバル企業や自分たちの顧客、サプライヤー、市民団体から近隣、マスコミ、親会社および株主、定借の家主、証券化した場合の投資家、ファイナンス、格付け会社、行政、そして従業員。これらのステークホルダーを全て視野に入れ計画を遂行する時、クライアントは果たして的確な設計与条件をタイムリーに整理できるだろうか。有能な建築家は空間にまつわるあらゆることに精通し、制約する法規を理解し解釈し、材料、構造、設備の技術をインテグレートし、新しい価値を創造するとともに社会的意味も提示できる。クライアントの輻輳した要望をプログラミングし最終的に形にするのみならず、潜在的な課題に対する解答をも含めることができる。今やどんな経済効率優先と思われる建築でもエンドユーザーなり従業員の意識の高まり、すなわち社会の成熟を背景に大きな意味での社会的正当性を抜きには成立しえないことをクライアントは知っておりその最適解を求めてきているのである。

新しい建築家像　建築は絵画や彫刻と違ってもとより街に出ている。元々極めて社会的な存在であったはずのものがなぜか政治的なもの，経済的状況から距離を置こうとしてきたように思う。政治は建築を利用し経済は建築を道具として扱ってきた歴史がそうさせるのか。しかし今世紀に入ってやっと経済社会はバランスを持った予定調和の世界に入り始めたように思われる。経済の思想と建築の思想が寄り添いはじめている。われわれはクライアントの多次元に渡る複雑な課題に対しはじめて正面から社会的思想を背景にした複合的な空間的解決を提示することができる時代にはいったのではないだろうか。

（あまの　なおき　株式会社竹中工務店大阪本店設計部長）

「知られざる建築家」の遺産

河野正彦

兵庫県営繕課は1920年以来、84年の歴史を刻み、本年第20代の課長を迎え今日に至っている。過去の県有施設の大半は、営繕課職員自らが設計し、その施工監理はもとより修繕、増改築、解体に至るまで建築のライフサイクルを通し一貫してかかわってきた。この歴史の過程は、県政の裏方を拝し魂込めて公共施設を造りつづけてきた数多くの無名の先達が紡いだものである。

その中から、現在の営繕課に大きな足跡を遺した二人の「知られざる建築家」を紹介したい。この両者は、知る人ぞ知る方々ではあったが、あえて「知られざる建築家」としたのは、いわば行政職を任ずる建築家にとって個人的名声は無用のことであり、他の無名の先達の代表でもあると考えたからである。

自主設計の伝統： 一人目は、終戦直後に第4代営繕課長を務めた人物である。当時、戦災復興事業の設計依頼が、あまりにも多く集中したため外部委託の話が持ち上がったことがある。そこで彼は、職員に意見を求めたところ、全員が一致してあくまで外部委託に頼らず自主設計を通すという硬い意志を示したので、一切外注に依存しない決断をした。以来自主設計が課の基本姿勢となったという。戦後のほとんどの官庁営繕が外注依存に傾斜する中、今日まで内部設計のポテンシャルを維持し得たのは、この時の英断があってのことである。彼は、昭和4年の新任職員の頃から持ち前の進取の気質を発揮したようで、平成2年10月、当課の70周年を記念した「兵庫県営繕の歩み」という本誌の特集記事に寄せた一文で「先輩を差し置いて自ら職場業務体制の改善対策を実践し、前例踏襲主義的な傾向を改め、業務の近代化と効率化を図るためいろいろ努力した。」と回想している。勿論設計においても傑作を遺している。中でも南欧の城郭をモチーフとした神戸高校（旧制神戸1中－昭和13年竣工）は、生徒から「ロンドン塔」と呼ばれて親しまれ、平成14年の改築の際、同窓生による保存運動によって本館の三分の一が改修保存されることになった。（この改修・改築も営繕課の自主設計・監理による。）課長時代には、有能な職員を営繕課に引入れ多くの力作を完成させた。その中には後に大学の教授に転身した人物や、二人目のエピソードで紹介する、後の第7代営繕課長などがいた。そして、彼らの作品を建築関係誌に発表するなど、自主設計集団としての兵庫県営繕課を外にアピールするとともに、外部の新しい建築技術の吸収にも努めた。更に、営繕の地位向上、業務の近代化、設計・監理技術の向上等の観点から全国営繕主管課長会議、近畿6府県の営繕課長会議、県下の公共団体の営繕主務者会議を提唱している。残念ながら全国営繕主管課長会議は実現に至らず、他の二つの会議は、実現させたが長続きせず数年で途絶えたと聞く。しかし、後年その形態と名称を異にするものの、その趣旨に沿った会議は全て実現し現在に至っている。これこそ彼の先見性と見識を如実に物語るもので、その気風が新しい組織と人材を醸成し、全国的にも稀な自主設計を堅持する官庁営繕の基礎を築いたのである。

ワンマン・コントロール： もう一人は、昭和35年総合庁舎建設工事事務所建設課長として現在の兵庫県庁舎のマスタープランとその第1号館の実施設計を担当し、昭和38年同所長としてそれを完成させた人物で、昭和40年には第7代営繕課長として、県庁舎第2号館・議場を完成させた。そして昭和46年に退職するまでの営繕課長時代に多くの県有施設の秀作を実現させた。これは彼の建築家としての優れた構想力と、設計に向かう飽くなき情熱によるところが大きいことは言うに及ばない。しかし私が注目するのは、彼の懐深い人間性に基づく卓越した指導力である。この課長に関する伝説的な逸話は、我々孫弟子にあたる職員も数々耳にしているが、その多くは後進の指導育成に関することである。技術専門員制度の確立、アンザル会という若手の技術職員を中心に企画・運営される自主研修会の育成、更には設計水準の向上を図るため、設計会議における徹底した計画検討など、その制度や手法は、今日まで受け継がれている。又彼は、仕事に向かう職員の基本姿勢として「ワンマン・コントロール」を推奨した。これは設計・監理一貫体制のことで、当時の地方営繕組織で一般化し始めた設計、監理分離体制がわが県でも議論されたとき、彼は公共建築の高度で多様な技術的、機能的要求に応えるためには、設計・監理一貫体制で望む必要があるという強い信念から、この分離論を毅然として否定し、逆にそれを兵庫県営繕課の基本精神として定着させたのである。彼の薫陶を得た多くの営繕の後継者達は、数々の営繕事業を達成すると共に、次世代の人材育成にも貢献した。因みに、かの阪神・淡路大震災における応急危険度判定や被災度調査、仮設住宅の実施計画策定及びその施工監理等、災害復旧業務に迅速かつ的確に対処し顕著な成果を達成したのはその後継者達であった。

建築家の姿： 以上二人の「知られざる建築家」の足跡を辿る時、天与の才能によって優れた建築を世に出し、その作品とそれに由来する名声とによって広範な社会的影響力を発揮するという、ステレオタイプの建築家像とは対極を成す建築家の姿が見えてくるのである。彼らは、兵庫県という限定された地域で、しかも名声とは無縁の立場で優れた作品を創り、同時に良質な公共建築を生み出す組織を創り、後継者となる人材を育むという役割を果たした。これは一地方官庁の営繕課という特異なシチュエイションにおける事例であることを考慮するとしても、そこに生きた「建築家の姿」に今回のテーマのヒントを見つけることができるのではないだろうか。

（こうの　まさひこ　兵庫県県土整備部まちづくり局営繕課　主任技術専門員）

各論2—施主から—

様々なシーンの響き合う街

小林幹彦

建築を取り巻く状況は、複雑になる一方である。構想され建設される建築物が成り立つための背景や制度が次第に複雑になってゆくからである。「人間社会における事象は、生物の進化論と同じく、単純から複雑へと常に一方向に変化する。過去は常にのろく感じられる。」（ピーター・タスカ「不機嫌な時代」講談社、1997年）

私は大阪・西梅田地区で都市開発事業に従事しているが、経験的に開発事業にはおおよそ四つのカテゴリーの役割と作業があるといえる。経営計画における事業の位置づけや内容を方向付ける事業企画、テナントリーシングを中心とする営業活動、開業後の運営管理・施設管理などまず大きく三つのカテゴリーがある。そして、そのそれぞれの作業に対応して、区画整理事業などの基盤整備、諸々の官庁協議や地元協議、建築の計画・設計・工事監理などの業務が関係づけられ、建築・都市計画系の担当組織が分担している。開業後のメンテナンス業務も行って、建築の始まりから営業状態に入ってからの不具合に至るまで面倒を見ることになる。これが四つめのカテゴリーである。

開発事業に取り組む際には、経営上の効果を明確にしつつ事業者なりに街づくりの夢を描き目標を設定する。そのプログラムを構築しプロデュースするためには、先述の四つのカテゴリーを総合化してマネジメントできる組織と、プログラムを構築・調整できるプロデュース機能を持った人物が必要である。また、複雑になる一方の社会情勢に対応するため、外部の専門家とのコラボレーションも生じる。これらはケースごとに作業密度や広がりに差異があるが、開発事業の段階に応じた多彩なスタディや検討が行われ、その成果がプログラムに活かされることが多い。

さて、建築家は、諸々の条件や文化的背景を総合化する思考過程から建築を構想し、まとめあげる。そのプロセスは開発事業の生成過程と類似している。だが、世の中が複雑化して相当な文言をもってしなければ部分でもその姿を語れない以上、事業のプログラムは複雑になり、それに対応する建築を構想し成し遂げるためには、それなりの能力と努力が求められる。

「さまざまなシーンの響きあう街」とは、西梅田での私たちの街づくりにおける環境形成の方針を一言で述べたものである。建築のみが目立つ風景ではなく、建築や緑、人々と出来事が渾然一体となった都市的情景が街の中に数多く生まれるように、という街づくりの姿勢を示している。西梅田での街づくりは間もなく完了するが、「建築」から「街」へ観点が変位してゆく中で、私たちは、私たちと同じ考え方や姿勢を持つことのできる共同作業者と、場面に相応しい配役で今後も仕事ができれば、と考えているところである。

（こばやし　みきひこ　阪神電気鉄道株式会社建設部長兼西梅田開発室部長）

各論2—施工者から—

「軽率な建築家」と輝く技術者

中田義成

技術者の喜びと建築家の喜びとは異なります。技術者は街に溶け込む意匠とか有機的で明快な空間構成などでは血沸き肉踊ることはありません。技術の難易度とその完成度に喜びを感じるのだと思います。建築家との仕事で、それまでと違ったことをやろうという意気込みの下、軽率な思いつきに依った変なものを作らされることがあります。デザイン、コスト、性能が十分検証されたディテールがあるにもかかわらず、ちょっといじってデザインと機能のバランスを大きく崩したものを作ってしまいます。完成後は手直しに右往左往…。

一方、建物のすべてをデザインする熱意とパワーを持っている建築家もいらっしゃいます。もちろん機能にも十分な注意を払っており、責任感が強く、全てを受け止める覚悟も胆力も備わっているようです。だからといって前者を非難するわけではありません。既存の様式、構法をそのまま継承していくのは安全で確実ですが、これだけ技術が日々発展する時代なら新しいことにチャレンジするべきだと思います。そういった点で軽率なチャレンジも、結果を見ると失敗の部類に入るかも知れませんが大変大事なことだと思います。ただ十分な技術的フォローが足りなかっただけなのです。

材料技術が進歩し、使い手も変化し、建築はさらに新しい局面を迎えます。今後ますます、すべてを一人がコントロールすることは不可能になるでしょう。その際、建築の世界にエンジニアという独立した職種が確立されていればいいのですが、確立されていない場合、私達施工技術者、専門業者と対話を重ね、知恵を絞って、共に創造する手順を設ける必要が出てきます。

尊敬するエンジニアにピーター・ライスがいます。フルムーンシアター、ボブール（現ポンピドゥーセンター）構造計画、ガラスDPG支持ロチュール十ケーブルトラス等、多く業績を残していますが、彼も技術者の立場を心配し、著書*に書いています。

「十九世紀におけるエンジニアの先駆者たちは、高貴そのものだった。テルフォード、ステファンソン、ブルネル父子、エッフェル」。「今日のエンジニアは他人のエゴというスクリーンの裏側で仕事をしているのだ」。「論点は、エンジニアの貢献が十分に評価されることがなかったり、エンジニアが共に仕事をする建築家や他の人々の功績と見なされることが多いということである」。

熱意たっぷりの建築家が難問にぶつかり悩んでいる時、なにげなく解決策を捻り出す。特に評価は望まず、できた建物を一人眺めて小さくガッツポーズ。そんな日本の静かな技術者たちは、もっと多くの親密な対話でさらに輝きを増すのではないでしょうか。（原文のまま）

＊ピーター・ライス自伝—あるエンジニアの夢みたこと

＊ピーター・ライス著　岡部憲明監訳　鹿島出版会

（なかた　よしなり　株式会社中田工務店常務取締役）

各論2―施工者から―

「建築家」に望む「職能」

長谷部完司

生産過程の川上である設計が、品質・原価・工期を大きく左右するのは、建設業に限らずすべての生産行為に共通するのではないか？設計者が施工者の「生殺与奪の権を握る」と言っても過言ではないが、施工者にとって望ましい「建築家」の職能とは何であろうか。

■設計施工におけるデザインマネージメント　ゼネコンの設計施工における設計者の役割は、施工者にとっての理想形を追求したものといえる。近年、大手ゼネコンでは、詳細設計を設計当初から取り込む傾向にある。設計者は、生産担当者と協働しあらゆる生産情報を設計に反映する中で、材料選定・ディテールの検討を専門メーカーと行い、協力会社を巻き込んだ施工図作成＝生産設計を行う。生産設計を設計初期から実施することで、品質・原価の精度も向上している。さらに海外調達・グロス購買・ＰＣ化を設計時から検討することで、原価低減を図っている。あらゆる生産情報を「シームレスにすり合わせた」設計を行い、工程及び原価管理において施工者のよきパートナーである設計者のあり方は、設計と製作が一体となった工業製品の生産方式に近いものと言える。ここでは企業戦略に基づき、生産知識と生産システムを統合する「デザインマネージメント」が重要な職能となっている。

■安藤忠雄氏のデザインマネージメント　私が、世に言う「建築家」と仕事をした最初の経験は、安藤忠雄建築研究所の設計によるセビリア万博日本館である。プロジェクト担当の方からは、各種施工図はもとより、型枠の留め方・セメントの配合にまで細かく注文を受けた。スペインのワーカーに日本的な納まりを教えることは想像以上に困難であったが、デザインのみならず、「作る過程のディテールを追求する真摯な情熱」と、「施工者と共に苦労を分かち合う姿勢」は作り手の心を大きく動かし、デザインと技術の「新たな出会い」をもたらしたと感じている。さらに日本の木造建築を石文化の国スペインに持ち込み、使用材料も様々な国から選定するなど、万国博にふさわしい生産方法を考案し、施工中にはメディアを巻き込んで職人と交流するといった、社会的・文化的要素を生産プロセスの中でマネージメントする手法は新鮮な驚きであった。

■生産プロセスをデザインし「価値」を創造する　情報化社会が進展する中、「建築家」が、生産の川上段階において、関連する生産知識と生産システムを統合するとともに、現場ともの作りの過程に深くかかわり、参加者の「創造性」を引き出す生産プロセスをデザインすることは重要ではないであろうか。「設計」と「施工」は分断された職能ではなく、協働して「価値」を作り上げていく職能と考えたい。「建築家」という言葉が職能を規定するのではなく、もの作りの視点から職能が語られることを切に希望してやまない。

（はせべ　かんじ　株式会社竹中工務店大阪本店作業所長）

各論2―建築の周辺から―

人への心に己の心を

山岸　豊

偶然必然　今、建築に携る者あるいはこれから建築家を目指す若人たちが、もう一度自問自答しなければならない命題である。

建築家という新しい職能が導入されたのは明治維新以降である。日本政府は富国強兵の政策から脱亜入欧を推奨し建築の分野でも鉄筋コンクリート造がもてはやされ、一方日本木造建築は暗黒の時代を迎えた。それは同時に日本本来の「棟梁」の役割が変わることをも意味した。このことが生活現場から棟梁と施主とのコミュニケーションを欠落させ日本固有の生活文化の否定にまでつながった。

では、その「建築家」は？建築基準関係法令での建築士法によると「建築士は設計・施工監理の業務を誠実に行い建築物の質の向上に努めなければならない」と定義づけられている。しかし現状は建築家の机上の理論や名誉欲などがその弊害になっている。

先人達の叡智（建築家に託す思い）をここで紐解こう。古くは紀元前１世紀のローマの建築家・ウィトルウィウス。『建築十書』のなかで「建築家は文章の学、描画、幾何学、歴史、哲学、音楽、医術、法律、天文学の知識を身につけるべきだ」と論じた。故・河野通祐氏は著書のなかで「住居は人間が生活をする場で設計活動においては篤志家であるべきだ」と、また、故・内井昭蔵氏も「今の建築が問題なのは、建築から人間と自然が欠落しているからだ」と嘆いた。なるほどそこには共通項がある。また、養老孟司氏もある番組で「今の日本人の問題点は事物に対し適当であり本気の思考が無くなっている」と力説していた。

それでは建築家としての“良識な気質”を身につけるのはどのような実践が必要であろうか。それには先人たちが残してくれた建築物の空間体験――五感＋こころや茶道、お花、歌舞伎など日本の固有文化との共生が大切であり、この重層により人格が形成される。

建築家はもっと社会参加をして市民とのコミュニケーションを計り建築文化の普及に努め、施主の要望に対し個性あふれる「美術」を創るか「工芸」を創るかを判断すべきである。マスメディアに翻弄された一部の施主の無情に対し建築人は挫けてはならない。

しかるに建築の原点は住居であり根元は福祉である。建築設計は施主の人間性を理解し、個性ある建築家の“心のかたち”としての“うつわ”を提供しなければならない。施主がその空間に心身をゆだねるとき“平安と温かさ、そして感動”がある。建築家は日本の風土や環境を理解し、東洋哲学を習得した住空間――五感＋こころを提供する“黒子”に徹すべきである。

思いやりの　こころのこころ　こころして　人への心に　己の心を

感謝合掌　本屋のおっさん

（やまぎし　ゆたか　大龍堂書店店主）

建築教育におけるスタジオ・フィールド・ワークショップ

本多友常・平田隆行

建築家の変質

建築家の職能は縮小の危機に晒されているという。しかしそれはむしろ歓迎すべき状況でもある。

現代の建築家達は、設計技術に支えられた職能の聖域が、規格化されたものに次第に突き崩されつつあることを、薄々感じ続けてきた。さらには図面情報のデジタル化が、技術の修得を基盤としていた職業意識さえも、大きく変質させようとしている。

建築家は総合的な判断力とともに、工学的な技能の高さが求められ、これに応えるために長い間の修練を積むことにより、高いレベルを維持することが出来た。

ところがその裏面には、専門領域の閉鎖性による、知や情報の独占を自らの保身のヘッジとしていたことも否めない。

電子情報の時代を迎え、紙の図面が独占的な知の集積体ではなくなりつつあろうとしている。それでも皮肉なことにいまだに技術の専門性は、図面という紙の厚みを持ったハードカバーを代用品として、売買され続けているようなところがある。

しかし手段が変れば本質も変化する。

ここで奇妙な現象がおこりつつある。図面が施工図に匹敵する精度で描かれるようになると、入力作業が増大し、見えがかり上設計の重要度が増加したように見える点だ。しかしそれは、専門性の手の部分が肥大化しているだけで、頭の部分が成長したわけではない。

実は社会は既にそのことは承知しつくしている。むしろ図面という隠れ蓑に頼り続ける建築家たちは、自らがピエロであることを知らないピエロになりかねない状況に、直面しているとさえ言える。

建築教育の現場

建築家は工学的な技能の高さが求められることは言うまでもないが、それを越えて、創造力としての総合性が問われている。

現代の建設技術は，誰でもできる技術だと思っていてほぼ間違いない。それぞれに深い世界があることは当たり前のことであるが，知らないことに怖気づく必要はまったくない。むしろ発想の可能性を広げるための，課題の変換力や、実体験としての思考の身体化が不可欠となる。つまり頭の柔らかさと、実感を如何にもてるかの工夫が教育のツボとなる。これは今に限ったことではなく、昔から皆が頭を悩ましてきた課題でもある。

その試みのひとつとして、和歌山大学の建築教育においては、ゼミを中心としたスタジオ、フィールドワーク、ワークショップに力を入れている。

ここではそのいくつかを紹介することにしよう。

自主演習

設計教育において、特徴的なものとして捉えているもののひとつに、自主演習がある。これは「学生の自主性や創造性を喚起するために，学生の自発による知的，創造的，システム思考的な活動や努力に対して評価を与える授業科目」として位置づけられている。

建築においては、学生自らがテーマを決定し、それを遂行していくことになるが、低学年では建築模型制作や実測調査などの訓練に近いプログラムを希望する学生が少なからずおり、これを背景として自主的に各自の興味を掘起こしていくことを推奨している。

特異なものとしては、枝の小屋造りがある。このプロジェクトは，空間の可能性をスケール感や素材感とともに体得することをめざしており，若者たちにとっては，楽しく面白く，そして厳しい体験的創造の試みとなる。まさに遊びの延長にある身体で覚える空間創造と言える。

TWIG　SHELTERと名づけたこのプロジェクトは、枝打ちされて落された小枝や、雪の重みで自然落下してきた杉の小枝をあつめて、麻紐で結んでいくだけの単純な作業によっている。どんな空間を創るかは、傾斜地の状態、前に作成された隣のシェルターとの関係、素材として集められるTWIG（小枝）の量や強さを確かめながら、皆で相談しながら決めていく。これはちょうど建築の設計行為に似て，共同作業を通じて各人が好きな部分にかかわりながら，到達点のイメージが共有され、次第に確定されていく。

実測調査とインターンシップ

和歌山大学では学部3回生の前期までは、建築設計と同時に緑、水、物質循環、福祉環境、地域計画、都市環境リサーチなど、自然環境から計画環境にいたる広範な見識を身に付けることを旨としており、専門の建築教育は各ゼミへの配属が決定してからスタートする。

ゼミ配属が決まるのは3回生の夏休み直前であり、急発進で社会の仕事場を見るインターンシップがある。同時に毎年どこかで何らかの実測調査を行なう。これは現実の世界と、図面化という抽象化された表象の世界を、身体的な感覚として結びつけることを狙っており、ここでほとんどの学生は実測した図面を簡単には図化できないことを体験する。

近年では紀伊大島にある3つの集落調査を実施してきており、その成果は住民意識調査を含めた集落についての変容のありさまを分析している。

社会との結びつき

ほぼこのような体験に根ざした訓練を経て、年末の共同作業によるコンペに参加した後、4回生としての個人作業へと移っていく。

研究室では、そのベースに「空間体験・訓練」、「地域環境の調査・分析」、「社会活動参加」、の3本柱を据えており、この教育課程において、最近では高野口小学校の改修、改築に結びつく提案が、町議会での採択に結びつくなど、実施設計を通しての社会との結びつきを強めている。

つながる場所としてのスタジオ運営

学生が地域に出て自分のフィールドを持つようになると、問題を発見し難問を突きつけられ、日夜作業に追われるようになる。するとどうしてもその作業だけに没頭してしまう。しかしグローバルで同時代的な問題、あるいは社会や歴史に通じていると解決の糸口が見つかることもある。ローカルで活動しつつ、世界最先端で話されている言葉を知ること。ローカルな問題をコンテンポラリーな問題として捉え、別の世界に向けて発信すること。この、ローカルな実践とグローバルな情報が交錯する場所として、スタジオの意義がある。フィールドでは問題をつかみ取り、スタジオでは情報を交換し合って知恵をだす。それを武器にもう一度フィールドに向かう。ミクロに観察しながら複眼思考で眺めることを学ぶのである。

異なる得意分野を持つ人が突然口を挟む「偶然』が起こりうる場所、グローバルな建築情報が自ずと集まり、なぜか知ってしまう場所、たえずだれかと議論をおこなえる場所、それこそがスタジオなのだ。ここでは一方的に知識や技能を伝えるというよりはむしろ、たえず「なにかが創られて」いて、たえず「何かが起こって」いて、たえず「何かが集まって」くる場所である。この状況を創り、維持することが、建築を学ぶ環境づくりとしてとても大切なことである。

トナリは何をするヒトぞ・フィジカルなスタジオ空間

隣にいる同級生が楽しそうに行っている作業がなんなのか？　何を深刻そうに考えているのか？　共通する問題はなんなのか。無関心を装いつつも、隣の机の作業の進み具合はやる気とレベルをインスパイアする。それだけではない。この横目で見ていたことが後々大きく役に立つ。自分も似たような課題に直面する日がきっと来る。その時、この隣の机で行われた作業を思い出すかどうか？　同じスタジオでいろんな人がバラバラに、ところ狭しと作業することは一見効率が悪いように見えるけれど、時と場所を共有して考える場こそが建築教育スタジオの醍醐味だ。だから、建築設計のスタジオは、設計・研究のテーマを絞り込むのではなく、できるだけ多様なテーマが同居していた方が、包容力が豊かな方がいい。

ちょっと難しい文献を読む読書会、人を呼んでの講演会などがたえずプロデュースされていることが大切である。

Think globally, act locally・ネット上のスタジオ空間

ヴァーチャルなweb空間がコミュニケーションを補完する。先輩、後輩、卒業生、教官、地域、他大学、異分野。それはいま何をしているのかをたえず世界中に発信し、フィードバックを得ること、だ。

かつての地方大学は情報の中心から遠いという不利な条件を抱えていた。それは情報が集まらないということではなく（情報を得ることは昔からさほど難しくなかった）情報を発信する機会を持てないということ、つまり雑誌社などマスコミとの距離だった。それは「どうせ地方だから」という諦めと、「いくら良い建築を建ててもメジャーにはなれない」という劣等感を抱かせた。だが、今は違う。

ローカルでしかなかった試みが広く評価される可能性が開かれている。それはネットの力である。学生が今行っているプロジェクトを、そのまま公表し、設計演習の結果を世に問うことができるのだ。手軽に双方向に発信できるブログ（blog）やコンテンツマネジメントシステム（CMS）を安価なPCの上に組み立てるだけで、自分の言葉を世界に発信する「可能性」を持てる。世界に向かう緊張感を持つのである。

もうひとつ、ネットのスタジオの持つ重要な意義は、卒業生、つまり異世代のつながりだ。就職先での実践報告から現役学生への助言、就職・アルバイトの募集、最新の建築情報など意義は大きい。常に学び続けなければならないのは卒業生でも同じこと。生涯にわたって学び、また自分の成果を還元する場所としてのスタジオがネットの上にあれば、現役学生、卒業生ともにメリットがある。さらにネットでつながっていさえすれば、年に一度くらいはフィジカルなスタジオにも集まって直接議論もできるだろう。

建築教育とは、学生自身が建築との対峙の仕方を自ら試行錯誤して学習する行為である。発見すること、つくること、発信すること。たとえコストにあわないものであれ、真剣に調べ、何度も創りながら壊し、世に問う。このサイクルを行なえる状況・機会・場所をつくること、これが建築教育の実践に他ならないであろう。建築設計教育の実践とは一握りのエリートにデザインのオリジナリティを開発させるものではない。むしろ建築が理想的に生み出される場所を維持すること、その環境の中で建築を考え創ってみるという経験を与えることにあるのではないだろうか？

（ほんだ　ともつね　和歌山大学システム工学部　環境システム学科教授
ひらた　たかゆき　和歌山大学システム工学部　環境システム学科助手）

法改正シリーズ・1

景観緑三法の公布と施行

岡本哲夫
京都府土木建築部都市計画課課長補佐

「景観緑三法」と呼ばれる景観関係の３つの法律、①景観法②景観法の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律③都市緑地保全法等の一部を改正する法律―が平成16年６月18日に公布され、一部を除いて今年中に施行されることとなった。

景観緑三法の背景

地域の歴史や文化、風土に根ざした美しい街並みやすぐれた景観に対する人々の意識が高まる中、全国に500近い景観条例が制定され、地域独自の取り組みが行われるようになってきたことを背景に、国土交通省は、「美しい国づくり政策大綱」（H15.７）を策定し、景観に関する総合的な法体系の整備を位置づけた（図１）。

景観法の概要

景観法は、５つの基本理念と住民、事業者、行政の責務を明確化した上で、景観行政団体による景観計画の策定と景観形成のための行為規制を行う仕組みや支援制度等を定めている（図２）。

（１）景観行政団体　景観行政を主体的に担うのは市町村が望ましいと考えられるが、景観条例を持つ市町村は全体の14%という現状があるため、政令指定都市及び中核市以外の市町村については、都道府県との協議・同意により景観行政団体になれることとされた。

（２）景観計画　景観計画の策定と計画区域内の建築等の行為規制（届出・勧告）は、法の基本となるものである。景観条例から景観計画への移行がしやすいよう、また、地域の特性に応じた特色ある取り組みを阻害しないよう、条例による規制の強化や緩和、手続きの付加等ができることとされている。

景観計画は、都市計画区域に限らず、農地や山林も含めて景観上必要な区域について定めることができる。計画の策定に当たっては、公聴会等住民の意見を反映するための措置を講じるとともに、都市計画区域等にあっては、都市計画審議会の意見を聴く必要がある。

景観計画には、①景観計画の区域②良好な景観の形成に関する方針③行為の制限（建築物等の形態意匠を含む）に関する事項―などを必ず定め、そのほか必要な場合には、屋外広告物の制限や景観重要公共施設の整備に関する事項などを定めることができる。

（３）景観重要建造物・樹木・公共施設　景観行政団体の長は、景観上重要な建造物や樹木を指定することで、その現状変更を許可制にすることができる。また、景観上重要な公共施設を景観計画に位置づけることで、計画に即した整備を促し、景観の観点から占用許可の基準を追加することもできる。

（４）景観協定　景観計画区域内の住民自らが景観に関するきめ細かなルールづくりと運営を一体的に行えるもので、建築協定と同様の仕組みである。

（５）景観地区　より積極的に景観形成・誘導を図るべき地区について、市町村は都市計画として建築物等の形態意匠等の制限を定めることができる。その場合、建築主は建築計画が制限に適合していることの認定を受けなければならない。

支援措置

ソフト面での支援として、景観協議会や景観整備機構の仕組みが用意されている。景観重要建造物には建築基準法の規制緩和が受けられることや、建築物及び敷地の相続税の適正評価がなされるというメリットがある。予算面では、「景観形成事業推進費」や「まちづくり交付金」が創設されたほか、電線の地中化の集中的実施や特例制度も設けられている。

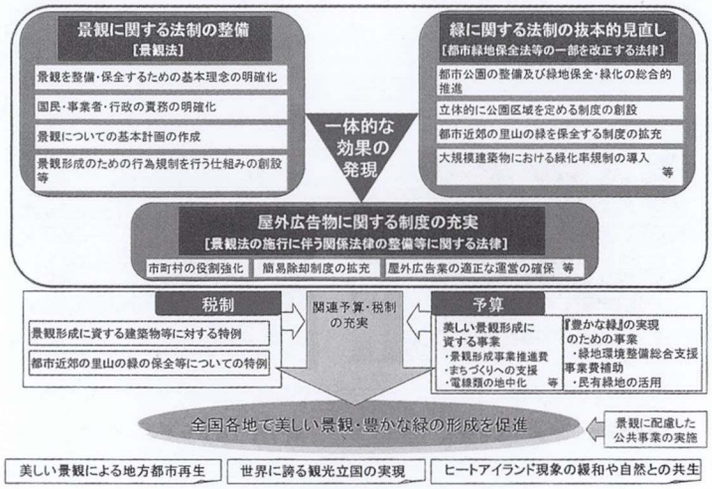


図１　景観緑三法の体系



図２　景観法の枠組み

法施行に向けて

多くの都道府県と同様に、京都府においても、市町村を対象とした説明会の開催や関係課による庁内連絡会議を設置して検討を行っている。検討課題としては、①府と市町村との役割分担の整理②府域の特性に応じた特色ある計画、制度の構築―等が挙げられる。

府域の市町村で景観条例を策定しているのは京都市を含めて５市町であり、法制定を機会に多くの市町村が景観行政団体となり、景観形成の取り組みが進むよう努力していきたい。（おかもと　てつお）

資源循環型建築システムをめざして
～ショッピングセンターにおける取り組み～

須賀順子
㈱竹中工務店大阪本店設計部

近年、資源循環型社会をめざし、「３Ｒ」と称した取り組みが国の施策として推進されている。「３Ｒ」とは、「リデュース＝ゴミ発生の抑制」「リユース＝再使用」「リサイクル＝再生利用」の３つの言葉の頭文字である。本建物では、設計・施工の各段階で効果的な建築材料の３Ｒに取り組み、資源循環型建築物の実現を果たした。中でも注文生産の要素が多い建築において、比較的難しい領域である「リユース」に積極的に取り組んだ点が特徴である。



積極的に「リユース」に取り組む

建物の概要

本建物は、延床面積約17,000㎡の平屋建てのショッピングモールである。実施した３Ｒの取り組みは図１に示すものであり、主に次の５項目である。

①解体後に鉄骨をリユースするため、組み立て・解体時にRC柱と鉄骨梁の施工性の良い接合工法を考案
②建築部材・設備機器とも新古品・中古品をリユース
③建物解体後のリサイクルを考慮し、柱、外壁にRC部材を採用
④躯体を化粧化し、ファイリングや仕上げ工事の材工をリデュース
⑤施工時の仮設材に建設廃材をリユース

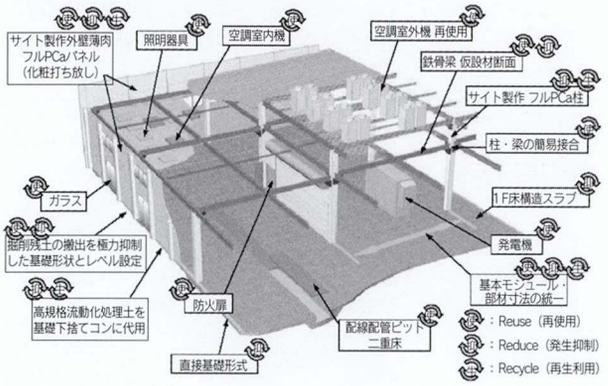


図１　３Ｒの取り組み

構造設計におけるリユースの取り組み（主に上記①と④）

現在、鉄骨部材は、図２に示すような流れでスクラップとしてリサイクルされている。しかし、リサイクルよりもリユースの方が環境負荷の低減に、より効果的であるので、今回は、鉄骨部材を取り外してそのままリユース（再使用）することを念頭においた構造計画をめざした。通常、鉄骨部材はＪＩＳ規格サイズの形鋼から選択するところを、本工法では仮設リース鋼材の断面から選択し、建物解体後は山留め鋼材として使う計画とした。リース鋼材は通常鋼材より安価に手に入ることも、もう一つの利点である。



建物解体（スクラップ化）　スクラップの回収　高温の炉により融解

図２　鉄骨リサイクルの流れ

次に部材を健全な状態で解体できるようにするため、PCa柱と鉄骨梁の接合方法を考案した。鉄骨造の場合、一般的に柱梁接合部は、解体時の取り外しを考慮しない図３aのような構造となるところを、今回は、図３b、図４に示すように、仮設材梁受けブラケットを利用し、取り付け・取り外しが容易な接合工法を考案した。建物架構は、PCaRC柱を所定の位置に設置した上でフラットスラブ形式の１階床コンクリートを打設し、前述の柱梁接合部を採用することで、柱脚剛接合、柱頭ピン接合のフレーム構造としている。

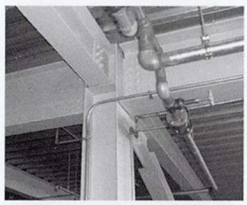


図３a　一般的な接合工法



図３b　簡易接合工法

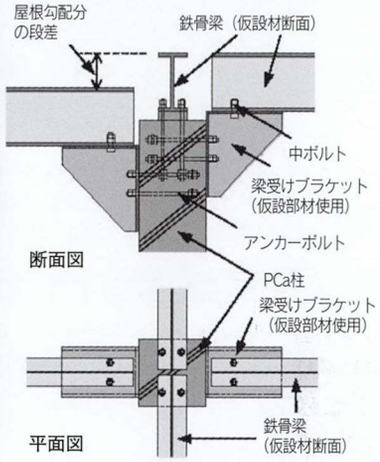


図４　柱・梁の簡易接合工法

最後に、外壁には幅３m、高さ４～６mのサイドリブ付きPCaRC壁（図５）を考案し、図６に示すように設置し、壁自重は１階床を介して地盤に流し、壁が面外方向に受ける風・地震荷重は、リブを介して躯体と地盤に流れる構造としている。建物解体時には、PCa壁は別の建物の外壁や、解体時の作業床板にリユースできる。さらにこれらの柱、壁のRC部材は、リユースの後、破砕処理をして骨材等に再資源化できる点が循環型建築にふさわしい材料である。

図５　リブ付きPCa壁断面

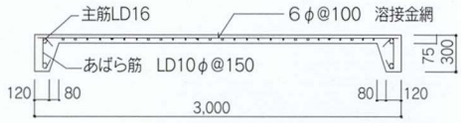




図６　PCaRC外壁

資源循環型社会に向けた試み

本建物では、コストを抑えた資源循環型建物に取り組んだ。その実現のためには、設計・施工過程において、関係者の理解が不可欠であった。これらの経験を通して感じたことは、資源循環型社会の実現のためには、建築に携わる者はもちろんのこと、それを取り巻く社会全体の理解に基づいたシステムづくりや取り組みが大変重要であることである。このプロジェクトにおける試みが、社会の資源循環に対する意識改革に一石を投じるものとなることを願っている。

（すが　じゅんこ）

国際デザインコンペティション大阪2004作品募集

デザインとビジネスの橋渡しを狙いとする㈶国際デザイン交流協会の国際デザインコンペの作品募集が始まる。今回は、「生活の場」を視点とした３つのテーマ“Out”“In”“With”。

２年後の「生活の場」を視点に“Out”はアウトドア、“In”は居住空間、“With”は生活のかかわりに関する提案を募集する。

応募資格　全世界、あらゆる分野のデザイナー、技術者、学生。個人またはグループでの応募可

応募作品　テーマに基づき、特定のプロダクトの提案だけではなく、サービスやシステム、さらにはビジネスモデルの提案も。未発表作品

作品受付　2004年11月１日（月）～11月30日（火）

応募方法　応募は、JDFホームページ専用サイトからの応募のみとする

審査方法　①テーマに対する適合性②社会及び時代への視点の的確性③独創性及び革新性④事業化に向けた提案の有用性・実現性―を審査基準に、外国人２名十日本人３名の総合審査員、及び複数のテーマ別審査員が審査

賞　金　総額27,500米ドル（金賞は10,000米ドル）

問合せ先　㈶国際デザイン交流協会国際デザインコンペティション大阪2004事務局
〒530-0001大阪市北区梅田1-3-1-800
FAX06-6346-2615
e-mail：sako@jdf.or.jp

『世界の巨大建造物ウィーク』TV放映

ナショナルジオグラフィックチャンネルでは９月19日～24日の22：00～24：00に、『世界の巨大建造物ウィーク』と題して全12エピソードを世界同時放送する。

■９月19日（日）

22：00「ブリッジ」―カナダのプリンスエドワード島と本島を結ぶコンフェデレーション・ブリッジ、そして香港の青馬大橋など。

23：00「世界最高層ビル建築」―20世紀初頭のクライスラー・ビルディングとバンク・オブ・マンハッタン・ビルディングの“空への競争”、そして“世界最高層”を達成した台北101まで。

■９月20日（月）

22：00「オアシス」―小さな国ドバイの７つ星ホテル、帆の形の外観をしたバージュ・アル・アラブホテル。そして北米以外では最高高さのウォータースライダーを設置した、完全脱塩のワイルド・ワディ・ウォーターパーク。



ドバイのバージュ・アル・アラブホテル

23：00「カーブ」―グッゲンハイム美術館（フランク・O・ゲーリー）は、ジェット機のデザインに使われるのと同じコンピュータソフトを使って設計された。

■９月21日（火）

22：00「空母ロナルド・レーガンの最新構造」―テスト航海に同行し、最先端技術を駆使したフライト・デッキからゴミ処理機までを取材。

23：00「超高層ビル　シアーズ・タワー」―シカゴに建つシアーズ・タワーでは、エレベータシャフトに乗ったり、アンテナによじ登ったり、窓ガラス掃きの目線でシカゴの町を見下ろす。

■９月22日（水）

22：00「ユーロトンネル」―英仏海峡トンネルは世界最長の50㎞トンネル。建造プロジェクトで生じた数々の難題を詳報。

23：00「ゴールド・シティー：タウトナ金鉱山」―かつては地下水をたたえた巨大な地下空洞は、今や一度に5000人の労働者が働く地下３㎞以上の深部に横たわる“金の街”へ。

■９月23日（木）

22：00「トップテン」―アメリカ最大のフーバーダム、カナダが誇るCNタワー、NYのエンパイア・ステイト・ビルディングなど、優れた建造物の10位～１位までをカウントダウン。

23：00「モスタル橋の再建」―400年以上にわたりキリスト教とイスラム教の架け橋であったモスタル橋は1993年11月、クロアチア部隊の砲兵射撃で破壊された。この再建を通して、中世の橋がどのようにして造られたか解き明かす。

■９月24日（金）

22：00「究極の高速道路アウトバーン」―11000㎞以上の世界最長のアウトバーンはドイツ全16州を結ぶ。ハイウェイシステムの全貌を検証。

23：00「スタジアム」―グランドの条件や天井の高さ、電動式天蓋など、様々な要求に応えるため最新技術を結集したスタジアムを検証。

•

147の国々に25カ国語で放映される本放送は、日本ではCS放送スカイパーフェクトTV、ケーブルテレビ、またブロードバンド配信で視聴できる。

講座「琉球の庭園と文化」

京都造形芸術大学日本庭園研究センターは、社会還元活動の試みとして1994年より庭園学講座を公開。

11回目の今年は、沖縄県立博物館、石垣市・那覇市・沖縄県の教育委員会、内閣府沖縄総合事務局、㈶海洋博覧会記念公園管理財団の協力の下、保存・継承・復元された琉球庭園を探る。

受講料　30,000円（受講手続き時に支払い）旅費別途

資料代　3,500円（当日会場で支払い）

定　員　70名（定員になり次第締め切り）

申込先　「受講申込書」に記入の上、郵便、FAX、または直接持参する。受付時間９：00～17：00。京都造形芸術大学瓜生山エクステンションセンター（FAX075-791-9233）〒606-8271京都市左京区北白川瓜生山２-116

●2004年11月20日（土）【石垣の庭園と自然】
宮良殿内庭園／石垣氏庭園の現地研修、米原ヤエヤマヤシ群生地／名勝川平及び於茂登岳の視察

●11月21日（日）【王城の庭園と公開シンポジウム】
那覇の世界遺産・識名園と、整備中の伊江殿内庭園の現場視察。14：30より沖縄県立博物館で、琉球の庭園と文化をテーマにシンポジウム

●11月22日（月）【琉球王国王城の地】
首里城跡及び周辺の地理・歴史の講義を受けた後、首里城公園、円覚寺跡、玉陵の現地研修

報告会「工業化住宅の展望」

■「少子高齢化元年に考える 工業化住宅の展望」

①研究報告「工業化住宅の歴史」

・住宅産業における商品システムと事業システム／赤崎盛久（神戸大学MBA）

・工業化住宅メーカーの設備什器開発／横田　哲（パナホーム）

・工業化住宅に果たした現場設計の役割／前田雅信（積水ハウス）

・住宅展示場の問題と課題／保田　孝（元パナホーム）

・工業化住宅市場の課題／竹内正人（大阪府立大学大学院経済学研究科博士後期課程）

②研究グループによるパネルディスカッション

コディネータ：森栗茂一（大阪外国語大学教授・都市民族学）／竹内正人

研究グループ：赤崎盛久／前田雅信／保田孝／横田哲

日時　2004年９月28日（火）13：30～16：15

会場　大和ハウス工業㈱２階大会議室
大阪市北区梅田３-３-５　TEL06-6346-2111

定員　100名（先着順）

参加　一般1000円、学生500円
都市住宅学会会員は500円、学生は無料

申込　氏名、勤務先（学校）、e-mail、TEL、FAXを記入し、㈳都市住宅学会関西支部事務局へ、FAX（06-6949-5741）で申し込む。

関西三大学合同建築展Final !!!

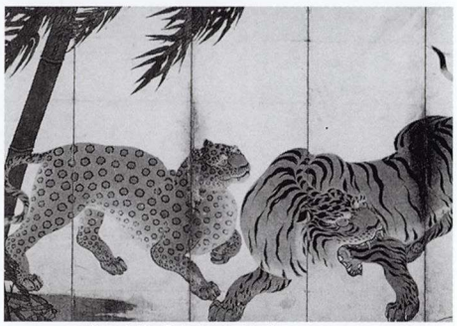
●テーマ：『神曲』―入場無料―
参加大学：京都造形芸術大学／京都精華大学／大阪芸術大学
会期　2004年9月20日(月)～9月26日(日)
　　10：30～18：30
　　休館日9月22日（水）
会場　京都精華大学　ギャラリーフロール
●公開講評会・シンポジューム―入場無料―
ゲストパネラー：渡辺豊和（建築家・京都造形芸術大学教授）／上田　篤（建築家・京都精華大学名誉教授）／高橋靱一（建築家・大阪芸術大学名誉教授）
モデレーター：宮本佳明（建築家・大阪芸術大学助教授）
日時　2004年9月25日(土)　12：00～17：00
会場　京都精華大学 黎明館L-201教室
問い合わせは、京都精華大学ギャラリーフロールへ。
〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137
TEL075-702-5230　FAX075-705-4076

唐桑・海と森の大工展

宮城県の唐桑半島はリアス式海岸の大漁場で、北上山地や室根山を背後に控え、木造建築や木造船など木の技術が発達し、気仙大工と呼ばれる家大工や船大工の棟梁を数多く輩出してきた。
この地で、船大工棟梁・岩渕文雄氏は半世紀以上にわたり500隻以上の小型の木造船を手がけてきた。浜の形や漁法に合わせて漁師と一体となって木造船づくりに携わったことが評価され、2004年、岩渕棟梁は「吉川英治文化賞」「国土交通大臣賞」を受賞した。
9月からのINAXギャラリー大阪では、岩渕棟梁の仕事を中心に、家大工による木を活かす技や、造般技術が現代建築にも応用される例などを紹介する。
入場無料。
会期　2004年9月3日(金)～11月19日(金)
　　10：00～18：00　毎週水曜日休館
会場　INAXギャラリー大阪　TEL06-6539-3518
　　大阪市西区新町1-7-1
　　INAX大阪ショールーム2階

特別展「近世京都の狩野派展」―京都文化博物館―

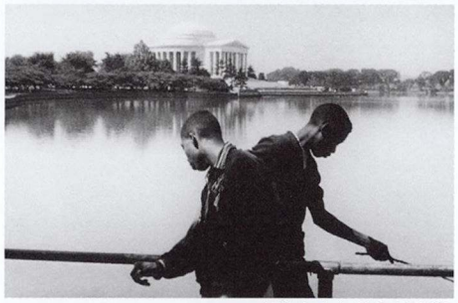
京都には、桃山時代に豪壮な画風で一世を風靡した狩野永徳の高弟・狩野山楽の家系があり、江戸狩野に対して京狩野と呼ばれていた。また、尾形光琳や円山応挙、曽我蕭白なども画業の初期には狩野派について学んでいる。
本展は、狩野派の作品、狩野派につながる作品―屏風、襖、軸など約90点―を展示して、近世京都画壇に新しい光を当てようとするもの。
■近世京都の狩野派展
会期　2004年9月18日(土)～10月24日(日)
　　10：00～18：00　月曜休館(祝日の場合は翌日)
会場　京都文化博物館・4階と3階の展示室
　　京都市中京区三条高倉　TEL075-222-0888
料金　一般1100円、大高生800円、中小生500円
展示　①近世京都の狩野派絵師たち
　　鶴澤派／京狩野家／その他の狩野派
　　②狩野派と近世京都画壇
　　琳派との環流／上方浮世絵師の基盤／写生画風前史／アナクロニズムの源流―室町回帰の絵師
■講演会「狩野派における伝統と革新」―入場券要―



狩野山楽「竜虎図屏風」（部分）京都・妙心寺蔵

日時　2004年10月11日(月・祝) 14：00～15：30
講師　佐々木丞平（京都大学大学院教授）
　　佐々木正子（日本画家）
会場　京都文化博物館3階映像ホール（定員100名）
申込　往復ハガキに参加人数（2名まで可）、住所、氏名（返信面にも）、電話番号を記入し下記へ。
　　〒604-8183　京都市中京区三条高倉
　　京都文化博物館「近世京都の狩野派展」係
招待券希望者は日本建築協会(TEL06-6946-6981）へ。

カルティエ＝ブレッソン写真展

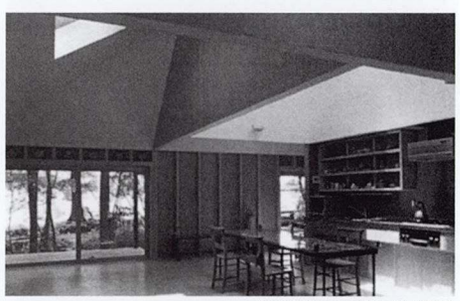


ワシントンD.C.1958年

アンリ・カルティエ＝ブレッソンの南北アメリカ大陸の写真を中心に構成した第2期展は9月21日から開催。
会期　2004年9月21日（日）～10月7日（木）
　　10：00～16：00　9/23、10/3は休館
会場　大阪芸術大学　芸術情報センター地下展示室
　　大阪府南河内郡河南町東山　TEL0721-93-3781

アトリエ・ワン『街の使い方』展

若手建築家ユニット「アトリエ・ワン」による『街の使い方』展が大阪で開催される。
「アトリエ・ワン」は塚本由晴と貝島桃代によるユニットで、生活世界の側から都市を歩き、観察し、既成概念にとらわれずポジティブに都市環境を読みかえて作品を制作している。
KPOキリンプラザ大阪4階には、「アトリエ・ワン」の建築を実寸大で再現。5階ではこれまで手がけた住宅の模型を回転盤に載せ、「踊る」立体作品を見せる空間を構成する。6階ホールには『ハウス・アサマ』の屋内イメージを再現し、壁面で「アトリエ・ワン」の作品を上映する。本展キュレーターは五十嵐太郎氏。
会　期　2004年10月2日(土)～12月5日(日)
　　11：00～21：00　会期中無休
会　場　KPOキリンプラザ大阪　TEL06-6212-6578
　　大阪市中央区宗右衛門町7-2
入場料　一般700円、学生500円、中学生以下は無料
招待券希望者は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。



『ハウス・アサマ』室内

建物を長く大切に使うための標語募集

平成11年に設立された建築ストック対策ネットワーク（事務局：㈳建築・設備維持保全推進協会内）では、設立5周年を機に「建物を長く大切に使うための標語」を広く募集する。11月中旬に審査結果を発表。
選ばれた標語は、建築ストック対策ネットワークとその構成20団体のホームページや印刷物で活用する予定。
応募期日　2004年9月30日まで（消印有効）
標語案　良好な建築ストックを増やす／建物を長く使い続ける／建築・設備を大切に使う／安心して使える建物・住まい／時代の変化に対応できる建物――これらのテーマを含む。
審　査　松本光平（明海大学教授）ほか10委員
応募方法　はがき、FAX、e-mailのいずれかで、標語、応募者名・住所・電話番号・勤務先・年齢を明記し、㈳建築・設備維持保全推進協会内 建築ストック対策ネットワーク事務局「ストック標語応募作品」係へ。
〒100-0004東京都千代田区大手町1-6-1
TEL03-5252-3873　FAX03-5252-3871
e-mail　sn1@nyc.odn.ne.jp

第4回 読者と選ぶ「建築と社会」賞入賞発表

総評

選考委員長 井上 豊

第4回の「建築と社会」賞については、本誌2003年1月号から12月号に掲載された建築作品及び記事について、読者からの投票をもとに、編集委員会によって第1次選考が行われた。その結果、建築作品部門11点中8点、記事・特集部門12編中6編が第1次選考を通過し、選考委員会に付託された。2004年5月31日に最終選考のための選考委員会を開き、別掲のように入賞建築作品及び入賞記事を選出した。

まず、建築作品部門では8点のうち「オアシス21」及び「静岡県富士水泳場」の2点が本賞にふさわしいものとして選出された。「オアシス21」は、名古屋市中心部の繁華街にある地上公園と一体化された地下施設である。斬新な感覚でパブリック空間のあり方の一つの方向性を提示しており、潤いのある魅力的な都心スポットとして評価された。「静岡県富士水泳場」は、雄大な富士山を遠望しながら、広く拡がる緑の大地の中での造形の面白さを表現している。自然景観と調和の取れた公共建築物であり、和らぎ感を与えるものとして選出された。その他の建築作品も、エコ対策の重視や環境配慮型の建築物、景観との調和あるいは旧い建物の再生プロジェクトなど捨て難い魅力的なものであったが、総合的な評価で一歩譲ることとなった。

記事部門では6編中2編が選ばれた。「循環型社会におけるサスティナブル開発～持続可能な地域再生に向けて～」は「サスティナビリティ」特集の中の1編で、次世代に引き継ぐべき都市・建築のあり方として、持続可能性のある地域再生の方法について述べている。

なお、当記事は選考委員の一人によるものであるため、当該委員を除外して選考した結果、入賞に決まったことを付記して、皆様のご諒解をお願いしたい。

「日本建築に見る伝統的な癒しの音」は「建築と五感」特集の中の1編で、聴覚との関わりを通して建築を見たもので、音風景の分析を行って室内の快適な音環境について述べている。いずれも近未来へ向けて大変示唆に富む視点を示しており、印象深いものであった。

最後に、受賞者の皆様にお祝いを申し上げるとともに、この企画についていろいろとご協力、ご尽力下さった読者の皆様、編集委員会はじめ関係者の皆様に感謝いたします。

講評

選考委員 徳矢典子

作品部門

静岡県富士水泳場

美しい富士山を背景に生かした、大胆で斬新な外観デザインであり、富士で育まれた清水が、時を経てこの地に生まれ出る「滴」をイメージしたとのことで、発想とともに造形性豊かな作品。内部は、鉄骨梁を檜集成材でカバーしたことで防錆、結露対策になるとのこと。この点についても水泳場建築への新しい試みではないかと、その効果を見守りたい。

オアシス21

バスターミナル、広場、店舗街など公共的施設を地中に内包させ、地上は「水の宇宙船」と名付けたシンボリックにデザインした大屋根のある公共複合施設である。「水の宇宙船」はガラスの空中歩廊と水盤面から成り、半屋外空間とした地下広場は宇宙船を通す光が投影して変化をつけるなど、複合的公共施設を楽しめる場に演出した工夫を評価した。なお。真夏の紫外線や温度管理、また半屋外から入る大風や大雨対策がどのように工夫されているかを素人の私としては知りたいところである。

論考部門

循環型社会におけるサスティナブル開発 ～持続可能な地域再生に向けて～

「サスティナビリティ」とは、対象領域が異なる分野や、多様な価値観をもつ人々の間に共通した規範となるものであるとし、「単なる省エネや建築物の保存再生にとどまるのではなく、建築をとりまく住環境・社会的環境・経済的環境を視野に入れ達成されなければならない」との指摘は、「サスティナビリティ」を理解する上で、タイムリーにしてかつ重要な視点であると高く評価する。

更にこの視点に立って「評価手法」「建築のデザイン」「地域再生」「コミュニティの育成」など広範囲に亘っての提案は建築の分野のみならず市民1人1人が真剣に議論するべき問題点ではないかと考える次第であり大変勉強になった。

日本建築にみる伝統的な癒しの音

日本建築にみる伝統的な音は、そのほとんどが「癒し系」であるとし、鐘の音・太鼓の音・水琴窟・風鈴などの例を挙げて論じておられ、その視点のユニークさとともに大変興味深く拝読した。とりわけ能楽堂の音響について、全国53カ所の能楽堂を対象に、能演者によるアンケート調査をした結果、舞台床下のカメに「音のはねかえり」が期待されていることや、全国20カ所の能楽堂の現場調査から、残響時間・足拍子の周波数分析及びカメの寸法と配置などのデータ一分析を行い、「カメは音響反射器として働く」との結論を導かれたことは、今後音環境の作出の参考になるのではないかと感じた次第である。

講評

選考委員　柏木浩一

入賞作品講評　「建築と社会」賞という限り、建築を作品単体の良し悪しだけで判断するのは難しい。あくまで、社会という、人と人が集まって関係性を構築する中での「建築のあり方・存在意義」を評価することになる。この枠組みでは、残念ながら「作品性は高いが社会との関連が希薄なもの」は除外させていただくことになったことを事前にお断りしておく。

まず作品「**オアシス21**」。「建築と社会」賞に相応しく、建築のあり方を通じて人と人との関係性に一石を投じた作品だといえる。ゆるやか斜面地の地下に、バスターミナルや店舗街などの巨大施設の大半を埋め込み、地上には象徴的に「ガラスの楕円形大屋根」を浮遊させる。その大屋根に張った水とガラスを透過した太陽光が、地下の広場に、移ろう光の波紋を無数に描き出す。それを介して人々がそれぞれの想いに浸る、という趣向だ。都市のど真ん中に位置しながら「人々が水中にいるような、安らぎを与える空間」を意図するとは、誠に大胆な発想力といえる。

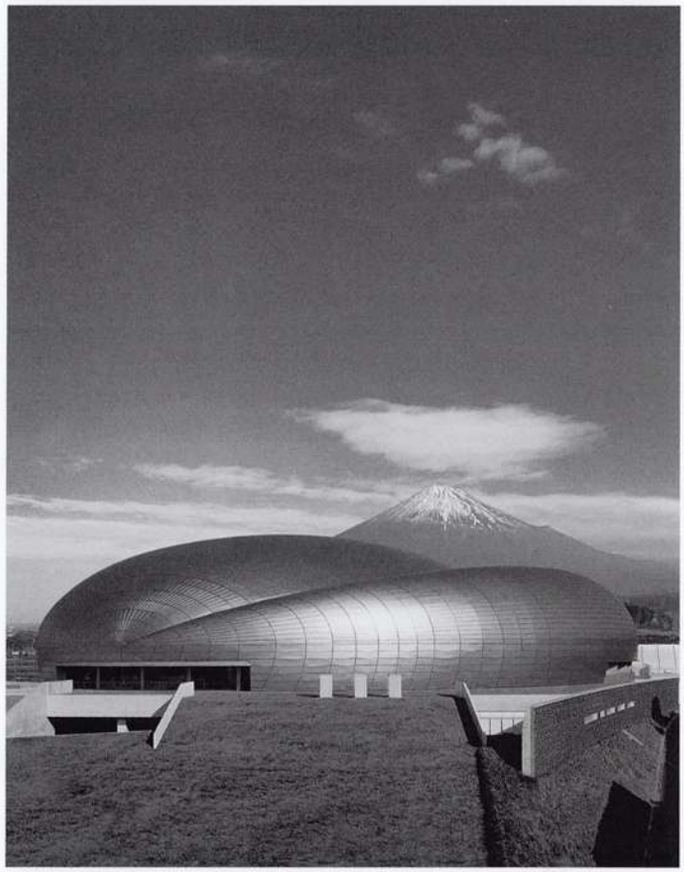
次に作品「**静岡県富士水泳場**」。「建築と社会」賞に相応しいかどうかは、社会との関係をどう評価するかにかかるだろう。建築を、敷地を取り巻く地域の固有性（少し強引であるが、ここでは社会を構成する因子の一つとみている）と一体として評価するものとすると、富士の裾野というロケーションの雄大さを勘案したこの形態は、妙に気を惹かれるものである。作者の言う「滴のイメージ」という形態が適切かどうかは自信が無いが、「もし、この形態を否定するとすれば、他にどんなものが考えられるのか」という自問自答で答えが見つからない以上、建築単体の作品性として問題ないこの作品は、評価に値することになる。

入賞論考講評　まず論考「**日本建築にみる伝統的な癒しの音**」。社会を構成する最大因子は人間である。その人間が外部情報を受容するとき使用する五感覚の、特に、聴覚に重心を置いて建築との関係に迫ったことが素晴らしい。なぜかというと、五感覚のうち、情報量の8割以上を流通させるといわれる視覚の研究は盛んであるが、それ以外の感覚研究はそれほどとは思えない。建築という、視覚偏重傾向の強い分野で、それ以外の感覚をもって建築を語ることの虚しさ（現代人が視覚以外の感覚機能を低下させているという現実。研究成果に対する建築界の反応の鈍さなど）があるからであろう。この種の研究が、本論考のように平易に語られ、その隠れた価値が建築界に敷衍していくことを熱望する。

次に論考「**循環型社会におけるサスティナブル開発**」。地球規模での人口の爆発的な増加と、その人たちが文明的な生活を希求するという現実を俯瞰するなかで、「地球規模での環境保全」が本当になしうるものなのかどうか、私にはわからない。しかしわからないといって手をこまねいているだけでは「人間中心の地球」に未来はない。そのなかで本論考の「サスティナブル開発」は、現実を直視し、少しでも包括的な視野に立とうとする手法として、好感が持てる。

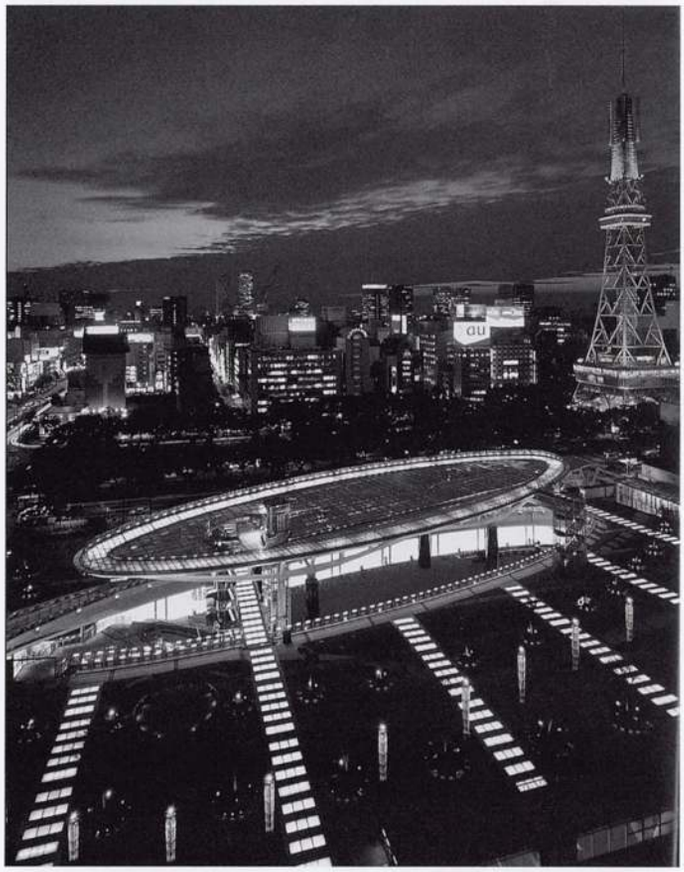
静岡県富士水泳場
所在地　静岡県富士市大渕266番地
設　計　昭和設計
監　理　静岡県都市住宅部営繕総室営繕工事室・設備室
　　昭和設計
施　工　飛島・勝村・石井・中村共同企業体

オアシス21
所在地　愛知県名古屋市東区東桜1丁目
設　計　大林組
監　理　名古屋市都市整備公社
　　栄公園振興
施　工　大林組



静岡県富士水泳場

2003年1月号掲載
写真　東出清彦



オアシス21

2003年3月号掲載
写真　Hideki CASAI. ナカサ&パートナーズ

循環型社会におけるサスティナブル開発
～持続可能な地域再生に向けて～

2003年４号掲載

●

執筆
鈴木克彦
（すずき かつひこ）
京都工芸繊維大学大学院助教授



1953年静岡県生まれ。1976年大阪大学工学部建築工学科卒業。1978年大阪大学大学院修了後、京都工芸繊維大学工芸学部住環境学科助手。現在、同大学大学院工芸科学研究科環境デザイン科学講座助教授。工学博士。持続可能な住環境デザインとマネージメント手法を研究テーマとして取り組んでいる。1990年に日本建築学会奨励賞、2004年に日本マンション学会研究奨励賞を受賞。著書に「建築協定の運営とまちづくり」（1992年）、「現代建築学建築計画１」（2002年）などがある。

日本建築にみる伝統的な癒しの音

2003年５号掲載

●

執筆
十倉　毅
（とくら つよし）
鳥取環境大学教授



1941年生まれ。1966年大阪工業大学建築学科卒業。1971年京都大学大学院建築学専攻修士・博士課程修了後、㈶日本建築総合試験所へ入所、建築物理部門の試験・研究に従事する。2001年より鳥取環境大学教授、一級建築士、工学博士。試験所時代の主研究テーマは、「床衝撃音に関する研究」、「伝統的町並みの景観保存と防災性向上に関する研究」、現在は学生と「鳥取県・名水地図の作成」に取組む。著書：建築物の遮音性能基準と設計指針（日本建築学会、1997年、共著）、住宅の結露防止（学芸出版社、2004年、共著）ほか。趣味：テニス、和蘭（春蘭・寒蘭）育成。

講評

選考委員　鈴木克彦

建築作品部門で本年度の選考対象となった作品には、コンバージョンやストック活用、環境への配慮設計など、現代建築に求められているコンセプトが多く見られた。今日の世相を反映してか、オフィスや工場など地味な建築が大半であったが、こうした中で受賞対象となった「**オアシス21**」は、事業コンペの入選作ならではのユニークな発想でもって、名古屋の繁華街を彩る劇場的空間を演出している点が関心を引いた。「水の宇宙船」と呼ばれるガラスの空中歩廊と水盤面で構成された大屋根、バスターミナルやイベント広場なども計画された都市型公園は、訪れる市民に安らぎと潤いを与える空間として機能しており、都心にありながらも、水、空気、光、緑と様々な自然の形との触れ合いを演出した巧みなデザインは賞に値するものである。

また、「**静岡県富士水泳場**」は、富士の大自然の中に溶け込もうと意図しているのか、一粒の水滴のようなステンレス板の空間ボリュームがとても印象的であった。その姿には、地域住民に親しまれる施設になってほしいという気持ちが表現されているようで、控えめな自己主張に好感が持てた。ドーム型の空間は、利用者が快適に楽しめるという要求にも応えたものであり、ヒノキの集成材で覆われた梁の連続も親しみやすい雰囲気を醸し出している。

論文・記事部門で受賞となった「**日本建築にみる伝統的な癒しの音**」は、普段から気になっている音風景の仕組みを科学的にわかりやすく解説した論文で、大変興味深いものであった。また、表面的な関心に終わらずに、五感で感じた感動をそのまま解明しようとした素直な研究者精神は、私たち計画学者にとっても大いに刺激となるものであった。

最後に、選考委員を務めていながら、拙稿の論文が受賞を賜ることになりました。誠に気恥ずかしい限りですが、拙稿を推薦してくださった方々には厚く御礼を申し上げる次第です。本論文は、英国での約１年間の在外研究の成果を取りまとめたものですが、英国と日本とで「サスティナビリティ」に対する取り組みにあまりにもの大きな落差があることに驚き、一刻も早く、その現状を報告したいとの気持ちが執筆の動機となりました。地球環境とコミュニティの健全性を同時に実現するような地域再生のあり方を考える一助となれば幸いです。

第４回読者と選ぶ「建築と社会」賞実施経過

●対象
・「建築と社会」2003年１月号～12月号掲載の「作品」、「論文・記事」

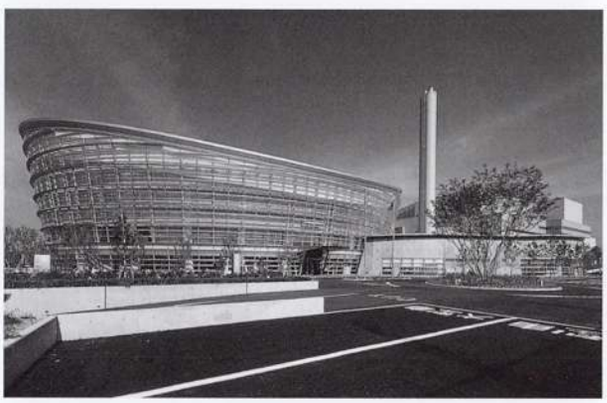
●投票及び選考
・「建築と社会」2003年12月号に実施要項掲載
・2004年１月15日、読者投票により作品部門11点、論考部門等12編を候補に選出。
・2004年２月18日、編集委員会において第一次選考を行い、上記候補の中より作品部門８点、論考部門６編を候補に選出。
・2004年５月31日、選考委員会にて最終選考を行い、以下のとおり選出した。

●入賞
・作品部門
「静岡県富士水泳場」
「オアシス21」
・論考部門
「循環型社会におけるサスティナブル開発」
「日本建築にみる伝統的な癒しの音」

●選考委員会（順不同・敬称略）
委員長　井上　豊
㈶日本建築総合試験所所長・
大阪大学名誉教授
委　員　徳矢典子
徳矢兄妹法律事務所弁護士
柏木浩一
兵庫県立大学教授
鈴木克彦
京都工芸繊維大学大学院助教授

作品作風：のびやか健康館
協賛

東急建設株式会社　大阪支店	大阪市北区豊崎3-19-3（ピアスタワー）　TEL06-6377-1090
株式会社　森本組　大阪本店	大阪市天王寺区夕陽丘町4-11　TEL06-6779-1482
株式会社　金本工務店	大阪府堺市家原寺町2-7-33　TEL0722-73-3228㈹
住友電設株式会社	大阪市西区阿波座2-1-4　TEL06-6537-3720
小山電気工事株式会社	大阪府堺市熊野町東4-2-10　TEL072-221-2525
株式会社西尾電設	大阪府堺市金岡町534-2　TEL072-257-3591
ダイダン株式会社	大阪市西区江戸堀1-9-25　TEL06-6447-8034
株式会社　きんぱい	大阪市大正区三軒家東3-10-12　TEL06-6552-5800
株式会社　丸仙設備	大阪府堺市八千代通1-28　TEL072-224-5382
不二熱学工業株式会社	大阪市中央区南船場2-1-1　TEL06-6261-2436
株式会社　大同設備	大阪府堺市東三国ヶ丘町3-1-18　TEL0722-53-2211
株式会社　共栄設備	大阪府堺市車之町東3-1-9　TEL0722-23-6400



空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

より快適な水環境をめざして
給排水衛生設備，冷暖房設備，消火設備の設計，施工

株式会社 西原衛生工業所 大阪本店

大阪本店　〒531-0071　大阪市北区中津六丁目8番4号
TEL 06-6458-3628（代表）
本　　社　〒108-0023　東京都港区芝浦三丁目6番18号
TEL 03-3452-7441（代）
支　　店　札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋・九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002　大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071　東京都千代田区富士見２丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044　埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

CHOYO
人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。

電気設備設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役　山本貴士

本　　社　〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目 2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代)　FAX 06(6385)1050

空気調和設備　産業設備
給排水設備　水処理施設
電気設備　環境施設

三機工業株式会社
取締役社長　宅　清光
常務執行役員関西支店長　畑佐彰保

関西支店　大阪市淀川区宮原3-4-30 ニッセイ新大阪ビル　電話 06(6350)8100
本　　社　東京都千代田区有楽町１－４－１　電話 03(3502)6103
支　　店　北海道・東北・関東・千葉・横浜・北陸・名古屋・京都・神戸・四国・中国・九州

電気設備工事設計施工
東光電気工事株式会社
関　西　支　社
常務取締役支社長　髙橋幸久

大阪市中央区高麗橋４丁目３番７号　電話大阪(6202)0325～9番
本　　社　東京都千代田区西神田１丁目４番５号
支　　社　北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・北関東・中部・九州

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社 三晃空調

本　　社　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1671
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03-3344-7911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡

電気設備設計施工
株式会社 三興社
代表取締役社長　上田正雄

本　社　大阪市北区堂島浜１―4―19（日土地堂島ビル）
電　話　０６（６４４２）３６７１（代）
支　店　東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電　話　０３（３６６６）１４７８（代）
営業所　堺・泉州・泉南・滋賀

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

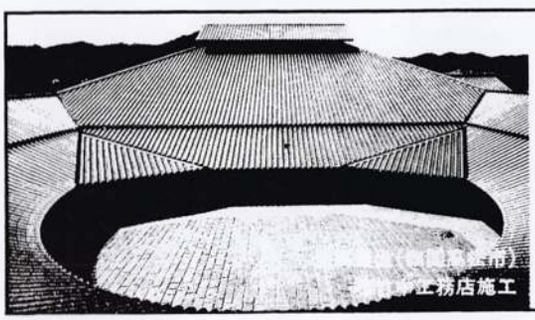
本　　社　大阪市中央区瓦屋町２丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
〒542-0066 電話 大阪（06）6768－5031代表
メンテナンス　電話　大阪（０６）６７６８－１６５１代表
東京支社　東京都文京区小石川１丁目12番14号(日本生命小石川ビル７階)
〒112-0002　電話（03）５６８９－２３５１代表

OKUJU
スペース クリエイター

建築に革命をもたらした技術がある
「大規模天井無足場工法」

内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社オクジュー

本社
大阪市北区西天満5丁目3番7号　〒530-0047
TEL(06)6312-4131　FAX(06)6312-7998
東京・九州・横浜・南九州・名古屋・上海



あらゆる屋根工事の相談は、
ナニワ瓦株式会社
〒556-0024
大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
☎　六五六一～七四五四
六五六一～七四一六
ファックス　六五六一～七四五四

＊奉仕感謝の店
タイル及び規格石一式施工

株式会社 川岸窯業商店
本　　社　大阪市西区西本町１の13の33
TEL.06－6532－0641(代表)
FAX.06－6535－5181
天理営業所　天理市丹波市新町４９

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・網野（07727）2−2220
舞鶴（0773）76−0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332−6861
TEL 東京（03）3272−8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443−6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252−6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83−2381
TEL 大阪（06）6877−1581

Digital Pri-Press
AOBA PRINTING CO.,LTD.
代表取締役社長 依藤孝行
青葉印刷株式会社
〒534-0027 大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-6351-5428 Fax.06-6351-5299

www.naniwa.com
We have hope

■印刷事業 ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業 SPプランニング・コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作、
株式会社NPCコーポレーション
本　社 〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel:(06)6351-7271(代) fax:(06)6352-7479
第二ビル 〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel:(06)6351-0128(代) fax:(06)6351-0208
東京支社 〒105-0004 東京都港区新橋6-17-2
tel:(03)3433-5211(代) fax:(03)5776-7733
(旧社名ナニワ印刷㈱、日本データネット㈱)

三和シャッター

三和の遮煙防火設備が、エレベーター前防火区画、たて穴区画、面積区画に威力を発揮します。

近年、多くのビル火災で煙により尊い命が失われていることから、いざというときに重要なのが遮煙防火設備。三和の遮煙防火設備には、サンシリカスクリーンⅡリフトアップタイプやウォークスルータイプ、ドアコン防火引き戸、ポストレス防火シャッター（袖扉納まり）、遮煙防火折りたたみドアなど、さまざまなラインアップが揃っています。



サンシリカ スクリーンⅡ（リフトアップタイプ）
コンパクトで低価格、避難階にも設置可能です。

CAS-0063（エレベーター直前で区画）
CAS-0061（エレベーターホールの空間を含めて区画）



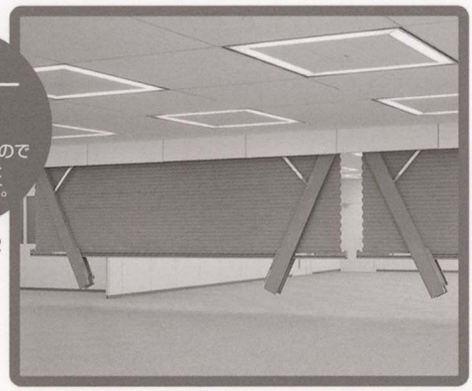
サンシリカ スクリーンⅡ（ウォークスルータイプ）
意匠性にすぐれた空間を提供します。

CAS-0029（エレベーター直前で区画）
CAS-0044（エレベーターホールの空間を含めて区画）



遮煙防火 折りたたみドア
狭い戸袋スペースにも、コンパクトに納まります。

CAS-0040
CAS-0066（潜り戸付:片開き）
CAS-0067（潜り戸付:両開き）



ポストレス 防煙シャッター（袖扉納まり）
柱を必要としないのでスッキリとした空間となります。

CAS-0002



ドアコン 防火引き戸（潜り戸付 下框なし）
省スペース化とバリアフリーを両立させました。

── 告示1111号失効に伴うエレベーター前防火区画の遮煙対策に ──

三和の遮煙防火設備

その他の国土交通大臣認定取得商品
CAS-0003（耐熱ガラスドア）／CAS-0004（木質系ドア）
CAS-0005（三和ドアコン）／CAS-0014（網入りガラスドア）
CAS-0016（三和ドアコン耐熱ガラス入り）
CAS-0031（サンシリカ スクリーンⅡ スタンダードタイプ）
CAS-0045（防煙シャッター幅5m超）
CAS-0053（ポストレス防煙シャッター幅5m超）

三和シャッター工業株式会社　関西ビル建材支店　〒532-0003　大阪府大阪市淀川区宮原4-4-50真和ビル8F　06-6396-6815

建築と社会 09 2004 vol.85 no.990
社団法人 日本建築協会 〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 電話06-6946-6981 FAX:06-6946-6984 http://www.aaj.or.jp
毎月1回1日発行 昭和24年3月19日第3種郵便物認可 ISSN 0912-8182
定価1,200円(税込)
正会員の購読料は会費に含めて徴収
雑誌 03379-9